

*MESA/BOOGIE*<sup>®</sup>

**LONE STAR**<sup>™</sup>

取扱説明書

## *Hello from the Tone Farm*

知性的で直観的なプレイヤーであるあなたが、アンプメーカーとして私たちに信頼を置いていただけただけで、これを我々は重く受け止めています。あなたのサウンドメイキングの一部としてこのアンプをお選びいただいたことで、あなたはもうMESAファミリーの一員となったのです。MESAファミリーへようこそ！私たちの目的は皆様を失望させないこと。偉大なアンプのオーナーとなった今、先人たちが築き上げてきた様々な真空管アンプの伝統、そしてそこにさらに積み上げられた技術の全てをあなたは享受することができます。このアンプがあなたの音楽にインスパイアを与え、またあなたの奥底に眠る音楽への情熱と意欲を導き出していくことでしょう。そして我々はささやかながらその手助けができればと心より願っています。

～私達の新たな友人へ捧げます。

## 使用上のご注意

この説明書を読んで下さい。

この説明書をなくさない様に保管して下さい。

注意事項を必ず読んでからお使い下さい。

安全事項にも従って下さい。

水の近くで当製品を使用しないで下さい。

汚れた時は乾いた布で拭いて下さい。

換気口を塞がないで下さい。説明書に従って設置して下さい。

暖房機器や、他のアンプなど、熱を発生する機器の近くに置かないで下さい。無理やり、形の違うコンセントに挿さないで下さい。有極プラグは片方のブレードが幅広くなっています。アース付プラグは2つのブレードの他にアース端子も付いています。アースは安全の為のものです。自宅のコンセントに差し込めなかった場合、電力会社に相談して下さい。

電源ケーブルを踏んだり、曲げたりしないで下さい。

落雷の恐れがある時や、長時間使用しない時は電源ケーブルを外して下さい。

修理が必要な時は専門家に依頼して下さい。ケーブルがダメージを受けたり、本体が傷ついたり、濡れたり、落として壊れたりした場合、修理に出して下さい。

換気の為に本体の後ろに必ず10センチ程度のスペースを空けて下さい。換気口の上に新聞、テーブルクロスやカーテン、といった物を置かないで下さい。

ロウソクや火が付くような物を本体の近くに置かないで下さい。

濡れている物も本体の近くに置かないようにして下さい。

注意：安全のため、本体を雨や湿気に晒さないで下さい。

なるべくコンセントの近くに設置して下さい。

注意：必ず適切な接続をしてからアンプを操作して下さい。そうしないとアンプが故障する可能性があります。

直射日光や高い湿度は避けるようにして下さい。

必ずアースを接続して下さい。

解体したり、ヒューズやチューブを交換したりする前に必ず電源ケーブルをコンセントから外して下さい。ヒューズを入れ替える時は、必ず同じタイプのヒューズを使って下さい。

動作中にチューブに直接触れないで下さい。

子供に触らせないで下さい。

故障を避けるため、ケーブルなどを接続する前に電源を切って下さい。

汚れを取るのに溶剤を使用しないで下さい。

必ず本体の裏に表示されている条件を満たすAC電源を使用して下さい。輸出モデルは各国の電圧に合わせてあります。お住まいの規定に従って電源に接続して下さい。

大きな音が出ますので、スピーカーに耳を近づけないで下さい。

Mesa/Boogieアンプはプロスペック用の機材ですので、規定に従って扱って下さい。

**上記の取り扱い注意事項と安全管理事項を必ず読んで下さい！**



## 目次

概要	1-2
役立つヒント	2-3
デモ・セッティング	3

### フロントパネル: コントロールと特性

INPUT (インプット)	4
FOOTSWITCH (フットスイッチ)	4
DRIVE (ドライブ)	4
CHANNEL SELECT (チャンネル選択)	5
DRIVE / CLEAN (ドライブ / クリーン)	5
THICK / NORMAL / THICKER	5
GAIN (ゲイン)	6
TREBLE / MID / BASS (トレブル / ミド / バス)	7
PRESENCE / MASTER (プレゼンス / マスター)	8
100 / 50 / 10 WATT (チャンネル出力切替)	8-9
OUTPUT & SOLO (アウトプット & ソロ)	9-10
POWER: TWEED / OFF / ON & STANDBY (電源スイッチ & スタンバイ)	10

### バックパネル:

FUSE (ヒューズ)	12
RECTIFIER SELECT (整流部切替: ダイオード & チューブ・レクチファイアー・トラッキング)	12
FX LOOP (エフェクトループ)	13
REVERB (リバーブ)	14
CHANNEL & SOLO (チャンネル & SOLO: 外部スイッチPORT)	14
BIAS SELECT (バイアス選択)	14-15
SPEAKERS & SLAVE (スピーカー & スレイブ)	15
REVERB REMOTE JACK (リバーブ・リモート・ジャック)	15
サンプル設定・ユーザ設定テンプレート	16-18
プリ・アンプの真空管の問題を診断する	19
真空管の詳細	20
スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド	21-26
パーツ・シート	27

# LONE STAR™

## 取扱説明書

### 概要:

このたびはLone Starをお選びいただきまことにありがとうございます。またMESA/BOOGIEファミリーの一員へようこそ!このハンドメイド・アンプは、これから先あなたに長年に渡る音楽的なインスピレーションと満足感を与えるべく、優れたデザインと良質なパーツによって作り上げられています。

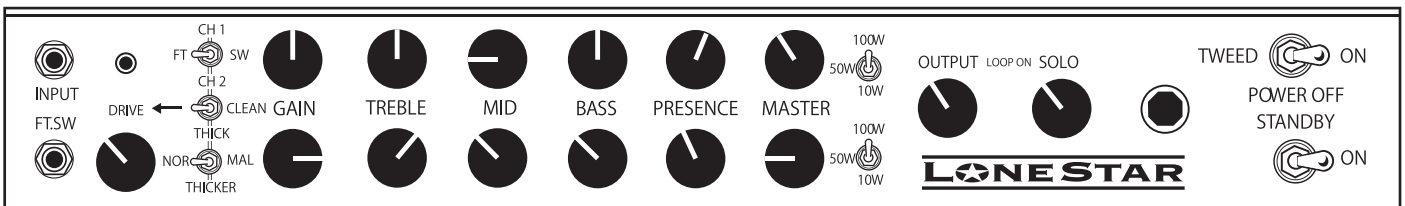
Lone Starは一見してシンプルかつ論理的にレイアウトされていることが見て取れることと思います。整然と配置された二つのチャンネルにより究極の操作性を実現。最初に音を出すだけでもそれぞれのチャンネルの個性的なサウンドははっきりと聞くことができるかと思いますが、この取扱説明書をお読みいただければ、より素早くかつ正確にお求めのサウンドを導き出すことができますでしょう。

二つのチャンネルは、煌びやかなクリーンサウンドから厚みのあるサウンドまで、幅広いゲインを備えています。Channel1(top)はローゲインからミディアムゲインにおいて、その天使のような温かいクリーンサウンドを作り上げることができる伝統的なゲイン構造がベースとなっています。

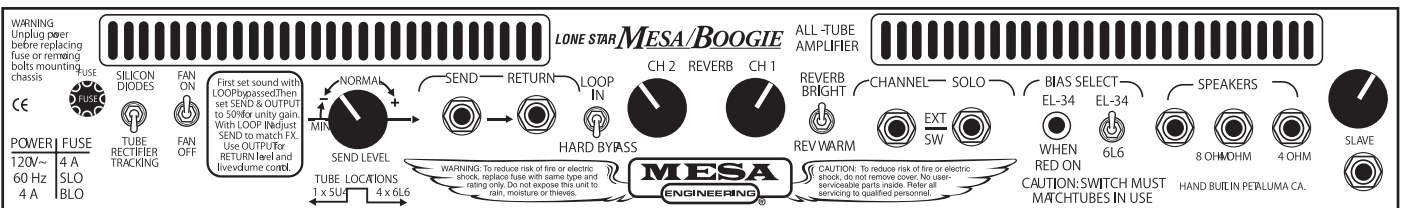
Channel 2は二つのサウンドキャラクターを持ち、Channel 1より若干高めめのゲイン設定のCLEANモードと、ハイゲイン・プリアンプのDRIVEモードとを、スイッチで容易に切り替えることが可能です。DRIVEモードでは、さらに2つの三極管ステージが加えられた回路となり、スイッチ右側にあるDRIVEコントロールにより、より的確なゲインコントロールが可能となっています。Channel2では切替スイッチによりヴィンテージ・トーンとモダン・サウンドのそれぞれの領域を自在に行き来することができるのです。

Lone Starは、特許取得済みのDuo-Class™技術を使用した、チャンネルごとの出力割り当てが可能なMESAの新技术“Multi-Watt™”機能を採用しています。この機能により3段階の異なる出力と2つのオペレーション・クラスの切替が可能となり、サウンドの幅がより一層大きく広がります。出力方式は、真空管アンプの伝統的な駆動方式であるプッシュ/プル・クラスAB駆動の50/100w、そして甘く美しい倍音構成が特徴の、シングルエンド・ピュア・クラスA駆動方式の10wの選択が可能となっています。

### フロントパネル:LONE STAR



### バックパネル:LONE STAR



## 概要(続き):

また整流部(レクチファイアー)の切替も可能となっており、硬質でパンチのあるシリコン・ダイオードと、ふくよかなヴィンテージ・サウンドが得られる整流管(真空管)によるトラッキングの2種類が選択可能となっています。

アウトプット・コントロールには、フットスイッチによりリード・プレイ時にさらに出力を上げることの出来るSOLOコントロール機能も装備しています。この二つのコントロールは、配線上エフェクトループの後に配置されており、ループ使用時におけるマスター出力コントロールとして機能します。またエフェクトループがオフの状態では、それぞれのチャンネルに配置されたMASTERコントロールで、最終的な出力調整を行います。エフェクトループがオフ(HARD BYPASS)に設定された場合、ループ回路は信号経路から完全に切り離され、より純粋な信号を出力することができます。またパワースイッチで、交流電源の変圧方式をTweed(Low)/On(High/Normal)から選択することが可能。Tweedでは内部電源を抑え、枯れたヴィンテージ・サウンドを、またOn時にはアンプのポテンシャルをフルに発揮するヘッドルームを確保することができます。このTweedモードの機能により、クリップした粒立ちの良いクリーンサウンドを生成することができるのです。

また上記にも述べたエフェクトループの機能により、外部エフェクトをより巧みに使いこなすことが可能。さらにHARD BYPASSモードでは、SOLO機能を必要としないスタジオレコーディングにおいて、より純粋なサウンドを出力することが可能となっています。

フル真空管駆動のリバースモードでは、ブライツ/ウォームの切替スイッチにより、プレイスタイルに応じたリバースサウンドをチョイスすることが可能です。ブライツ・モードではオールドアンプ回路のような、もやのかかった倍音成分が強調されたヴィンテージ・リバース・サウンドを作り上げることができます。またウォーム・モードではスタジオクオリティの美しいリバースサウンドを作り上げることが可能。この二つのモードはリアパネルのつまみにより、二つのチャンネル独自にミックス調整を行う事が可能となっています。

Externalスイッチポートは、Lone Starを大規模ラックシステム等に組み込むために用意されています。Channel及びSoloジャックは、チップ/グラウンドタイプのラッチタイプ・スイッチにそれぞれ対応するジャックとなっています。外部のプログラマブル・スイッチャーのチップ/グラウンド端子と接続することで、それぞれの機能をコントロールすることが可能です。

切り替え可能なバイアス・セレクト・スイッチは、キャラクターの異なるパワー管を載せ替える際に使用します。Lone Starは通常6L6パワー管を標準搭載していますが、別売りのEL34パワー管に載せ替えることで、より倍音成分の高いブライツなサウンドを得ることができます。パワー管のタイプに応じてバイアス・セレクト・スイッチの切替を行うようにしてください。

最後に、リアパネルに搭載されたSLAVEアウトプット・ジャックとレベルコントロールはLone Starをアウトボード接続の外部ラックシステムで駆動したり、大規模ステージでの追加出力としてステレオ・セットアップを行うための"DRY"アンプとして使用する際に接続します。エフェクト・センドとは違い、ここでの出力はブリアンプ及びパワーセクションを介した出力信号となっており、スピーカー出力信号からの分岐出力となっています。

NOTE: SLAVEアウト出力を使用した場合、エフェクトループRETURNジャックへは絶対に接続しないようにしてください。この接続を行うとフィードバック・ループが発生し、スピーカーの破損や鼓膜損傷につながる恐れもあるスキール音が発生します。

## 役立つヒント:

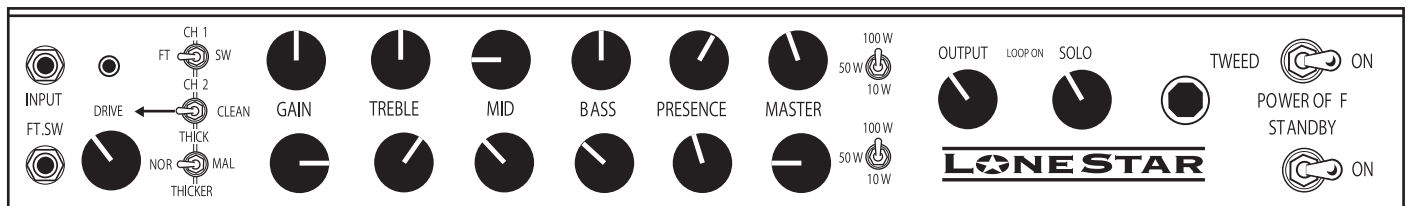
- 1.) 新しいアンプを購入後、修理や持ち運び等、運搬の際に使用することも考え、箱や梱包材は捨てずにしまっておきましょう。
- 2.) 電源ケーブルを接続する前に、パワー管を保護してあるプラスチックカバーは必ず取り外してください。
- 3.) AC電源ケーブルは、アースのあるACコンセントに接続してください。
- 4.) スピーカーへの接続はシールドケーブルではなく、必ずスピーカーケーブルを使用してください。

## 役立つヒント(続き):

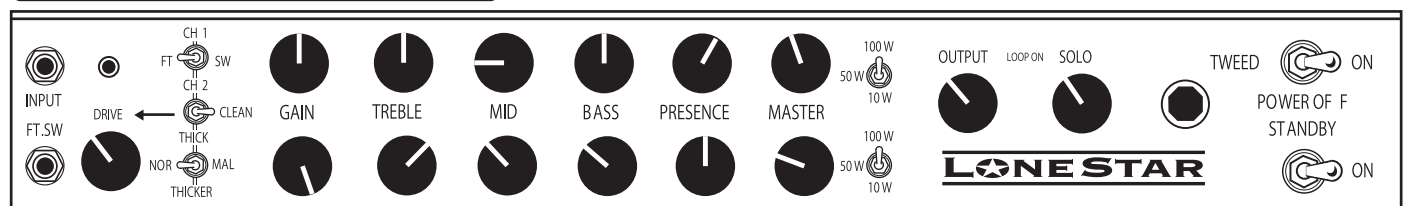
- 5.) エフェクトループへの接続は、必ずシールドケーブルを使用してください。
- 6.) フットスイッチを使用しない、または接続していない場合、フロントパネルのミニトグル・スイッチではチャンネルの選択が出来ます。
- 7.) エフェクトループをループ・イン・ポジションに設定しない場合は、フロントパネルのOUTPUTとSOLOコントロールは無効になります。ループがハード・バイパスに設定されている場合は、出力レベルの調整は各チャンネルのマスター・コントロールで行うようにしてください。
- 8.) MESAの全てのアンプに言えることですが、Lone Starの全てのコントロールは非常にパワフルです。そのためサウンドメイキングを行う際は、全てのパラメーターを3:00の位置以下で行うことが望ましいです。より良いサウンドメイキングを行うためには、つまみの量を上げることも、それぞれのつまみのバランスを取ることが重要となります。またつまみを上げすぎないことで、真空管の寿命を長持ちさせ、スピーカーにも余分な負担がかからなくなるので、大切なアンプを末永くお使いいただくために、正しい用法に従ってサウンドメイキングを行うようにしてください。
- 9.) AC PowerスイッチをTweed側に設定、バックパネルでTUBE RECTIFIER TRACKINGを選択すると、よりヴィンテージらしいサウンドを作り上げることができます。
- 10.) エフェクトループ接続を行う場合、以下の手順に従ってください。
  1. 二つのチャンネルでのサウンドメイキングをしっかりと行ってください。
  2. それぞれのチャンネル同士の音量バランスを均一になるよう、Masterにて調節してください。
  3. エフェクトループのセンド端子からお手持ちのエフェクトプロセッサのインプットに接続してください。
  4. エフェクトプロセッサのアウトプットから本機のリターン端子に接続してください。
  5. リアパネルのループスイッチをアクティブ(LOOP IN)の状態にしてください。
  6. エフェクトプロセッサの入力レベルをユニティーゲイン(0 dB)に絞ってください。
  7. エフェクトプロセッサの入力ゲインが最適になるよう、エフェクトセンドつまみで調整を行ってください。
  8. 演奏ボリュームが最適になるよう本機フロントパネルのOUTPUTコントロールでボリューム調整を行ってください。
- 11.) パワー管を6L6からEL34に変更を行う場合は、必ずリアパネルのバイアススイッチが正しい位置に設定されているかをご確認ください。セッティングが異なっていた場合、アンプや真空管に深刻なダメージを与える恐れがあります。

### サンプル#1: Sparkling Clean / Singing Lead

### デモ・セッティング



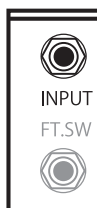
### サンプル#2: Roots Clean / Old School Clip





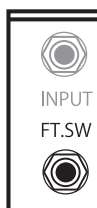
## フロントパネル: コントロールと特性

### INPUT (インプット端子):



楽器の入力端子です。ここに入力された楽器の信号出力はLone Starのプリアンプ回路へと送られます。本機は非常にハイゲインのため、マイクケーブルや断線しているケーブル等の使用は避け、ハイクオリティなケーブルの使用をお勧めします。

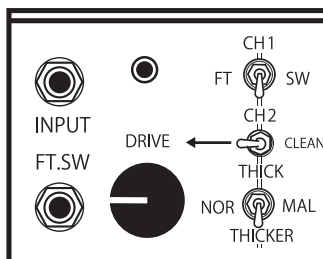
### FOOTSWITCH (フットスイッチ接続端子):



チャンネル切り替え用の1/4"ステレオ・フットスイッチ入力端子です。接続の際は必ずステレオケーブルをご使用ください。付属のフットスイッチでチャンネル切り替え、およびSOLOモードの切り替えを行う事が出来ます。

### DRIVE (ドライブ・コントロール):

ハイゲイン・プリアンプのChannel2におけるプリ・ドライブ・コントロールです。真空管を含むこの回路は、トグルスイッチにより切り替え可能で、Channel1よりもハイゲインなサウンドを作ることが可能です。DRIVEコントロールが有効(トグルSWがDRIVEポジション)になっている場合、この回路がゲインコントロール回路に組み込まれ、プリアンプ・ドライブと連動してドライブを生成します。



一般的に、GAINコントロールをDRIVEよりも高めに設定する方が優れたレスポンスとダイナミクスを得られると言われていています。実際にゲインを2:00~3:00の位置にしたままドライブを調整してみれば、このことがお判りになると思います。

ゲイン・コントロールをドライブよりも高めにセッティングすることにより、サウンドはウォームになり、またほとんどの方がこちらのサウンドを好む傾向にあります。逆にゲイン・コントロールをドライブよりも低めに設定した場合、サウンドはよりブライに、厚みのないチープなサウンドになりますが、こういったサウンドが好みの方は実験的にトライしてみるのも一つの手段かもしれません。

ゲインとドライブの相関関係を理解することは、良質なリードサウンドを作り上げるうえで、最も重要なことだと言えます。ゲイン・コントロールとドライブ・コントロールを全て最大まで上げていけば、トーンコントロールが効かなくなります。

しかし全てのつまみを目いっぱい上げるのではなく、ゲイン・コントロールとトーン・コントロールのバランスをしっかりと調整することが、良質なサウンドを作り上げるうえで最も大切であることを忘れてはいけません。



## フロントパネル: コントロールと特性 (続き):

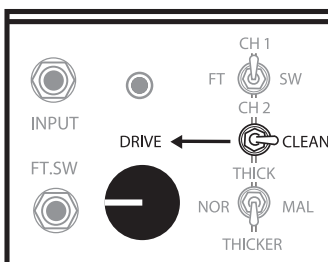
### CHANNEL SELECT (チャンネル切り替えスイッチ):



フットスイッチが接続されていない場合は、この3ポジションのミニトグルスイッチでチャンネルの切替を行います。チャンネル・セレクト・フットスイッチを使用する場合はスイッチ・ポジションをFT-SWの位置 (センター) に設定してください。

### DRIVE/CLEAN (ドライブ/クリーン切替スイッチ):

Channel 2 でドライブ回路のオン/オフを切り替えるスイッチです。このつまみをDRIVEに設定した場合、DRIVE回路はハイゲイン・リード・チャンネルとしてノーマル“Rhythm”サーキットの前に組み込まれます。

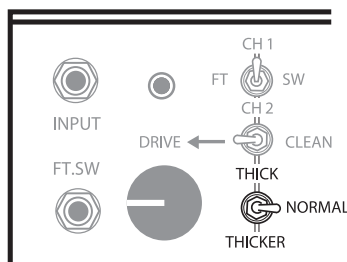


またこのスイッチをCLEANに設定すると、オーバードライブ回路は回路から完全に切り離され、Channel 2 (Channel1と同等のキャラクターで且つ少し高めゲイン設定) のCLEANモードとなります。“Rhythm”サーキットとは別にゲインを追加することで、Channel 2はブルース・ソロ・サウンドまたはリズムワークにおけるクランチサウンドとして、素晴らしいサウンドを得ることができます。

Channel 2 のCleanモードでは、DRIVEモードとは一味違う、素晴らしいサウンドを奏でられるでしょう。

### THICK/NORMAL/THICKER (ボイシング切替スイッチ):

このミニトグルスイッチでは、三種類の異なるボイシングを切替えることができます。トレブル・コントロールがどの周波数帯をエンハンスするかは選んだボイシングによって変わります。トレブル・コンデンサーの周波数帯を下げることで、この帯域におけるゲインを増加させます。これにより煌びやかなクリーンサウンドから、単音のソロ・サウンドにおける高域が強調された厚みのあるサウンドまで音作りが可能です。このスイッチを切り替えることで、クラシックアンプにおけるリードサウンドのテイストを再現することも可能です。



NORMALモードはクリーン・コードワークやトラディショナルなブルース・スタイルのソロ・サウンドにベストマッチングなトーンシェイピングとなっています。このポジションでは最も高域の信号がパスされており、3種類のモードのうち、トーンコントロール (TREBLE / MID / BASS) の最も良いバランスとなっています。言い換えれば、高域の範囲がBassやMidと同じような出力を持ち合わせたサウンドと言ってよいでしょう。つまり最も煌びやかなトーンが美しくブレンドされたクリーンサウンドを、容易に作り出すことができます。NORMALモードでは同時に、他の二つのモードのサウンドキャラクターと比較しても、ギター自身が持つ、真の輝かしいサウンドを忠実に再現するモードでもあるのです。NORMALモードは往年の“Black Face”のクリーントーンを求めるプレイヤーに最適なモードと言えるでしょう。

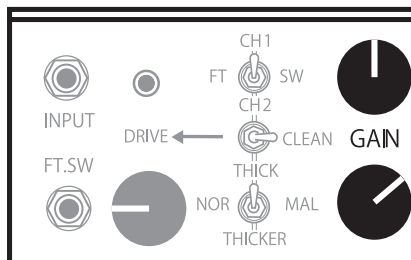
THICKモードは、NORMALモードに近いゲインを持ちながらも、出力を維持しつつ高域を若干絞り込んだトーンシェイピングとなっています。このモードでは中高域が厚めなトーンシェイピングとなり、太く芯のあるサウンドを作り出すことができます。ブリティッシュ・サウンドやドライブ・コードワーク等に向けたモードとなっています。

THICKERモードではさらに高域の周波数を絞り込み、その周波数帯のゲインを上げるモードです。往年のクラシックBoogieリード・サウンドに最も近いサウンドで、Mesa Boogie特有のハイゲインの伸びやかなドライブ・ソロサウンドを求めるプレイヤーに最適なマッチングとなるでしょう。

## フロントパネル: コントロールと特性 (続き):

### GAIN (ゲイン・コントロール):

このコントロールでは、各チャンネルごとに最適化されたカーブで、プリゲインの調節を行うコントロールです。Lone Starは二つのアンプが1つのシャーシに組み込まれており、視覚的には同じ位置にゲインつまみが配置されていますが、内部のサーキットはチャンネルごとに全く別の回路が採用されています。



多くのギターアンプ、特に真空管アンプにおいては、ゲインコントロールはプリアンプの一番パワフルなコントロールとして機能しています。これによりクリーントーンからドライブサウンドまで、サウンドの全体的なキャラクターとスタイルを構成します。しかしLone Starのゲインコントロールは単にドライブの調整だけにとどまらず、トーンコントロールに至る全ての回路におけるゲインの設定を行うためのコントロールとなっているのです。

ゲインコントロールがトーンコントロールを含むすべてのトーンに関連付けられるということを以下の1)ゲイン単独での特性 および2)トーンコントロール全体を踏まえたゲイン特性 それぞれの特性において簡単に把握していきます。

#### 1.) ゲインコントロールは単体で3段階の音色の特性を持っています

**Low(7:00-11:00)**では、最もクリーンなサウンドで、高域の倍音成分と明るいサウンドが、音に立体感を持たせます。

**Middle(11:15-2:00)**では音に厚みが増し、またリッチでウォームなサウンドと低域のレスポンスが、高域倍音成分に置き換えられたサウンドとなります。完全に歪み切っていないこのポジションにおけるサウンドは、Lone Starのベストなサウンドが最も多く含まれており、どちらのチャンネルにおいても非常に素晴らしいサウンドを簡単に作り上げることのできる帯域となっています。

**High(2:15-5:00)**では最も厚みのある、低域と中域が強調される帯域となっています。このポジションではロングサスティンでウォームなサウンドを得ることができます。

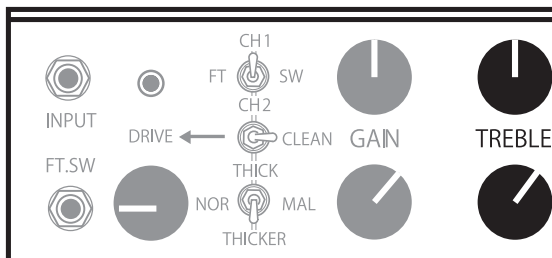
**NOTE:** Lone Starの強力なゲイン・ポテンシャルにより、ゲインをフルの状態で使用し続けると、真空管(プリ管)が振動し、場合によってマイクロフォニック雑音(真空管の振動によりノイズが発生してしまう現象)が起こる場合があります。Mesa Boogieでは真空管においても厳しい品質チェックを行っておりますが、高ゲイン設定における真空管の連続起動については予測不可なトラブルを起こす可能性もあります。長期間、真空管を安定した状態で使用するためには、ゲインを若干控え目にすることがお勧めです。

#### 2.) トーンコントロールと連動するゲインコントロール

基本的に、非常にシンプルな法則があります。ゲインが上がれば上がるほど、トーンコントロールの効果は薄れていきます。繰り返しとなりますが、ゲインをミドルポジションで設定することが、トーンコントロールによる音作りが最も効果的に行える最大の方法なのです。

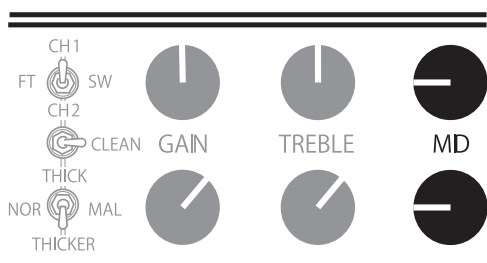
## フロントパネル: コントロールと特性 (続き):

### TREBLE (トレブル・コントロール):



多くの真空管アンプでは、トレブルコントロール (Lone Starの両チャンネルにおいても) はトーンコントロールつまみの中でも最もパワフルであり、またゲインコントロールに次ぐ、サウンドメイキングのツールと言えるでしょう。なぜならばトレブルは信号経路上でも最初のトーンコントロールとなるため (MidやBassはトレブルで調整を行った信号が送られる) 他のコントロールと比較してもはるかに優位に位置するコントロールなのです。その理由として、トレブルコントロールは後に続くコントロールへの周波数帯域にも影響を与える重要なコントロールであり、ここでのコントロールがその後のサウンドメイキングにお大きく関与していくことになるのです。

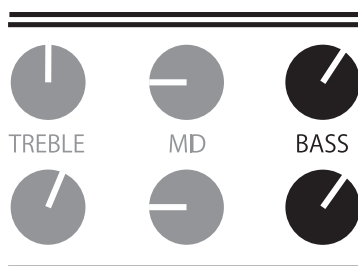
### MID (ミッド・コントロール):



MIDコントロールはサウンド全体の中域を調節するコントロールで、トレブルコントロールほどの劇的な変化はありません。このコントロールの傾向として、音を硬めにしたり柔らかくしたりする際の調整に使用される場合が多いです。

多くのプレイヤーはローミッドを太く丸くすると同時に、ピックアップノイズの軽減を目的にMIDコントロールのセッティングを(7:00~10:00)に設定することが多いようです。MIDコントロールつまみを上げていくと(11:30~1:30)サウンド全体は丸くなり、また立ち上がりの早いミッドレンジのアタック感が強調されていきます。

### BASS (ベース・コントロール):

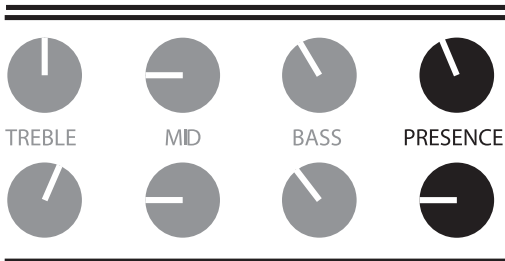


両チャンネルにおいてサウンド全体の低域を調整します。しかしながら低域のコントロールはチャンネル毎に異なります。MIDコントロール同様、回路上ではTREBLEを経由した信号で、全体的な効きについてはTREBLEで設定した値が基準となります。TREBLEを低めに設定した場合はMIDとBASSのコントロールはサウンドにもっと影響します。

サウンドのバランスおよびパワーを調整するには、最初にTREBLEつまみをセンター付近に合わせてからMIDとBASSの調節を行うと、サウンドメイキングがより一層しやすくなります。

## フロントパネル: コントロールと特性 (続き):

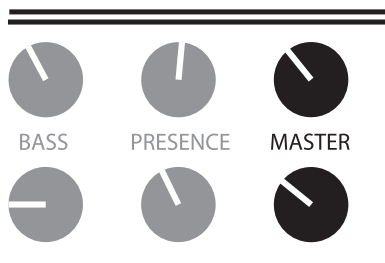
### PRESENCE (プレゼンス・コントロール):



PRESENCEコントロールはそれぞれのチャンネルのプリアンプ・回路の最後に置かれた高域のアッテネーターで、TREBLEよりもさらに高域の周波数帯の調節を行います。PRESENCEコントロールは非常にパワフルで広範囲なトーンコントロールとなっています。PRESENCEコントロールを低めに設定すると、音はダークになり、ソロプレイにおいてヌケのよい太く腰のあるサウンドとなります。

LONE STARにおいてベストなリードサウンドを作り上げるには、PRESENCEコントロールを絞り気味にした調整でミックスバランスを行うセッティングがお勧めです。

### MASTER (マスター出力):



このコントロールはプリアンプで作られたサウンドをエフェクトループ回路とドライバー・ステージへと送る信号の量を調節するコントロールとなります。それぞれのチャンネルにおいて独立したコントロールを持っているので、両チャンネルにおいて全く異なったサウンドメイキングを行った際にも、ここで相対的なボリュームバランスを整えることができます。MASTERコントロールでは、低めのゲイン設定でも音質を変えることなく、歪んだサウンドとの音量バランスを保つことが可能です。

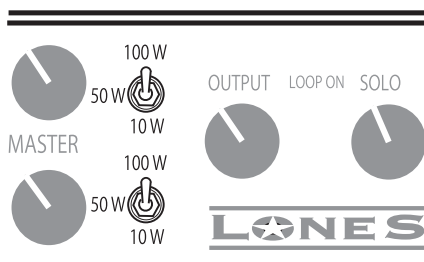
繰り返しとなりますが、MASTERコントロールは、両チャンネルのバランス設定や、エフェクトループにおける調整が行いやすい、9:00~2:00の間で調整を行うことをお勧めします。

**NOTE:** MASTERコントロールはエフェクトループへの信号出力の設定を行うため、ここで設定を上げすぎるとループへの出力信号が過大となり、ループに接続されるエフェクト・プロセッサへの入力オーバーロードとなるだけでなく、それぞれのチャンネルのバランス調整を行うことも困難になる恐れがあります。

**NOTE:** エフェクトループがHARD BYPASSに設定されている場合、両チャンネルのMASTERコントロールは、最終的なアウトプット・コントロールとして機能します。フロントパネルのOUTPUTとSOLOコントロールはエフェクト・リターンからつながる回路のため、HARD BYPASSに設定した場合はこの二つのコントロールもパスします。

### 100W/50W/10W: チャンネル出力切替:

このミニトグルスイッチで、それぞれのチャンネルの出力設定を行うことができます。製品概要の項でも述べましたが、チャンネルごとに出力の設定が可能なMulti-Watt™機能と、1台のアンプに2種類の異なるパワーアンプの出力方式を搭載したDuo-Class™特許システムとがここに見事に融合したのです。



100Wモード(スイッチup-4×6L6)及び50Wモード(スイッチcenter-2×6L6)では、二組(100W)または一組(50W)の真空管による、パワーとパンチに優れたプッシュプル:クラスAB駆動となります。この伝統的な駆動方式はアンプの過熱速度が遅く、また電気効率も高く、全般的に音楽的特性にも優れていることから、近年におけるモダン・チューブアンプの多くに採用されている駆動方式です。この二つの出力モードでは、ライブステージ等やコンサート会場等においてクリーンなヘッドルームと、太くメリハリのある抜けの良いソロサウンドを作り出すことができます。



## フロントパネル: コントロールと特性 (続き):

### 100W/50W/10W:チャンネル出力切替 (続き):

10Wモード(スイッチdown-6L6 ×2 in parallel)セッティングではMESA独自のスイッチ方式による独自のパワーセクションを有しています。ここで採用されているピュア・クラスAの駆動方式は、非常に熱を持ちやすく、また電気効率も悪いというリスクを持ちながらも、そのサウンドはクリッピングや耳障りなエッジ・サウンドもなく、温かみのある極上のサウンドとなっています。また同時にパワー管の出力構成は、当時のヴィンテージアンプに採用されていたものとまさに同一のシングルエンド駆動を採用しています。この回路の採用による2ndハーモニクス之美しさは、あらゆるスタイルにおいて微妙なニュアンスを作り上げるための最も有効な選択肢となるでしょう。

そしてプッシュ/プル回路で信号が分割されると、分割された信号それぞれにパワーとパンチが加わり、またそれらがミックスされることで3rdハーモニクス(1オクターヴ+5度上の倍音)が強調されていくのです。2ndハーモニクスはこの信号分割から再び信号が混じり合う際に相殺され、それが結果として音に甘みと高次ハーモニクスの強調となって顕れるのです。シングルエンド回路はこういった信号の分割、再合成が行われないため、純粋な倍音成分がそのまま出力されるのです。前述のとおり、シングルエンド回路ではクラスA同様高い出力や電力の効率性を求めることはできません。しかしながらその音楽的な魅力に満ち溢れた甘く温かいサウンドを求めるなら、シングルエンドはまさに究極の選択であることに間違いのないのです。10wにおける高純度のサウンドクォリティを体感すれば、この天使の歌声のような素晴らしいサウンドにきっと酔いしれることでしょう。

このギターアンプ創世記におけるヴィンテージ・トーンと最先端のチューブ・テクノロジーが一台に組み込まれたLone Starのサウンドはこれまでの既存の概念を打ち破り、弾く者を新たな表現力の世界へと引き込む、最強のアンプなのです。

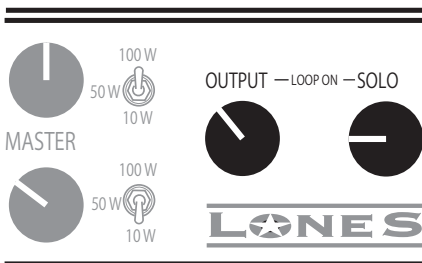
50wモードでは、パワー管の左右両端の2本を用い、丸みのあるしなやかなサウンドを作り上げます。これは、二つのチャンネルにおけるサウンドスタイルを決定づける上で、非常に重要な要素となっているのです。

セッティング例として、たとえばチャンネル1はクリーンなヘッドルームのために4本のパワーをフルに使用した100Wモードで駆動したとします。一方チャンネル2は50Wモードによるヴィンテージ風の電源回路でドライブ回路をバイパスした、パワークリップ気味のソロサウンドを作り上げます。その際50Wモード側の整流部をTube Rectifierに設定します。これによりサウンドはさらにヴィンテージテイストとなります。

**NOTE:** 50WモードでRectifierスイッチによる整流管、シリコンダイオードの切替はが出来て、100Wモード時には大容量ヘッドルームを確保するため、自動的にシリコンダイオード整流が選択されます。

### OUTPUT & SOLO CONTROLS (アウトプット/ソロ・コントロール):

**OUTPUT:** このコントロールはアンプ全体における出力ボリュームの設定を行うつまみです。GAINコントロールにて好みのサウンドメイクを行った後、二つのチャンネルの出力バランスをMASTERコントロールにて行い、その最終的なボリューム設定をOUTPUTコントロールにて行います。またOUTPUTコントロールがEffects Loop Returnのレベルコントロールとなります。



**NOTE:** 他のプリアンプと併せてLONE STARのパワーアンプ部のみを使用する場合はEFFECT RETURN端子が入力端子となります。SOLOコントロールはフットスイッチが接続されている場合においてブーストコントロールとして機能します。フットスイッチ端子はOUTPUTコントロールへとパラレル接続されており、また同様にパワーセクションのボリュームコントロールとなります。

**NOTE:** Lone Starのパワーセクションのみを、他のプリアンプと組み合わせてパワーアンプとして使用する場合は、特に以下の2点に注意するようにしてください。

- 1.) SENDジャックにダミープラグを接続してください。
- 2.) 出力レベルのコントロールはフロントパネルのOUTPUTコントロールのみ有効となります。(ただしChannel1が選択されている場合のみPRESENCEコントロールも有効となります)
- 3.) SOLOコントロールはフットスイッチが接続されている場合にのみ、ブーストコントロールとして機能します。

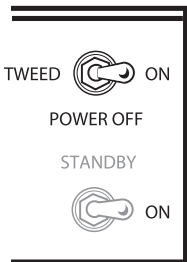
**NOTE:** 従ってLone Starをパワーアンプとして使用する場合はChannel1を選択することをお勧めします。

## フロントパネル: コントロールと特性 (続き):

### OUTPUT & SOLO CONTROLS (アウトプット/ソロ・コントロール、続き):

**SOLO:** このコントロールはフットスイッチが接続されている場合にのみ有効となります。SOLOコントロールはOUTPUTコントロールからパラレル接続されたアディショナル・ファイナル・アウトプット・レベルコントロールです。このコントロールは、必ずアウトプット・コントロールよりも高い値に設定するようにしてください。また出力レベルはアウトプットコントロールに依存しますので、アウトプットの設定が極端に低い場合や、逆に高すぎる場合、SOLOコントロールの効果は薄れます。音量はライブパフォーマンスに最適なレベルに最適化されます。

### パワー: TWEED/OFF/ON:

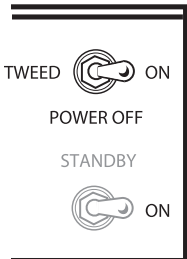


Lone Starの電源を入れるスイッチです。パワー管のウォームアップを行う事が非常に重要なので、この電源を入れてから、少なくとも30秒以上の間隔を置いた後、STANDBYスイッチをオンにしてください。電源を入れてからすぐにスタンバイをオンにすると、冷えたパワー管に一気に電流が流れ込み、パワー管を痛めたり寿命を縮める原因となります。

Lone Starは、TWEEDとON 2つの異なる電源電圧を選択する事ができ、それぞれの音には特徴があります。TWEEDは、可変電圧を内蔵しており、内部電圧を下げる事により、ビンテージの雰囲気を出しています。オーバードライブ・サウンドを出し易くなっていて、特にTUBE RECTIFIER TRACKING (真空管整流) モードにすると、その特徴が顕著になります。

POWER SELECT (パワー・セレクト) スwitchをONにすると、最大のパワーと、クリーンなヘッドルームを得る事が出来ます。

### STANDBY (スタンバイ・スイッチ):



このスイッチはLone Starを正しく安全に、かつ末永く使用するために非常に重要なスイッチとなっています。POWER ONで電源を入れた際、このスイッチがスタンバイの状態ではパワー管のアイドリングを行います。パワー管のアイドリングを行わずに電流を通すと、冷えたパワー管に一気に電流が流れ込み、パワー管の損傷や寿命を縮める原因となりますので、POWER ONにする際は必ずこのスイッチをSTANDBYの位置にセットしておいてください。

POWER ONの項でも触れましたが、POWERをONにしてから、少なくとも30秒以上のアイドリングを行った後、STANDBYスイッチをオンにするようにしてください。

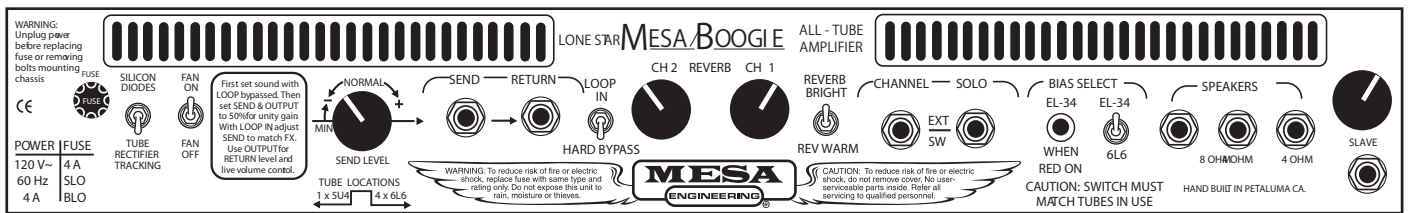
---

# 休憩所

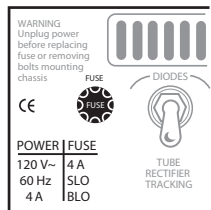




## バックパネル:



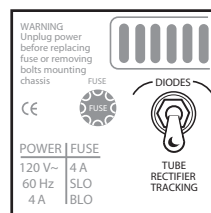
## FUSE (ヒューズ):



これは、メイン・ヒューズです。ヒューズは、外的要因による電源の過大入力からパワー管を保護する役割を担っています。ヒューズを交換する場合は、Slo-Bloタイプの同じ規格のものを使用して下さい。度々パワー管がショートしたり破損したりする場合は、ヒューズがとんでいる可能性が高いのでチェックして下さい。ON/STANDBY (スタンバイ) セクションの説明に従ってスタンバイ・スイッチをオンにしてもパワー管が正常な動作をしない場合は、即座にスタンバイ・スイッチをスタンバイに切り替えて、パワー管を交換し必要であればヒューズも一緒に交換して下さい。

スタンバイ・スイッチをオンにしても異常が見られないようであれば、真空管が一時的にショートしてヒューズがとんだ可能性があります。このような場合は安全の為に、隣の真空管、あるいは全ての真空管を交換してみるのも良いかもしれません。この場合、交換した真空管は予備として保管しておきましょう。また、ヒューズの予備は必需品です。

## RECTIFIER SELECT (整流部切替について):



このトグルスイッチにより、入力電源を交流から直流に変換する際の回路を、シリコンダイオードで行うか、整流管(真空管)で行うかを選択することができます。Dual/Triple Rectifier Solo Headより搭載され始めたこの整流部の切り替え機能により、より定格で安定した電圧を供給することが可能になりました。このスイッチは、フロントパネルにあるチャンネル・パワー・スイッチと連動して動作します。

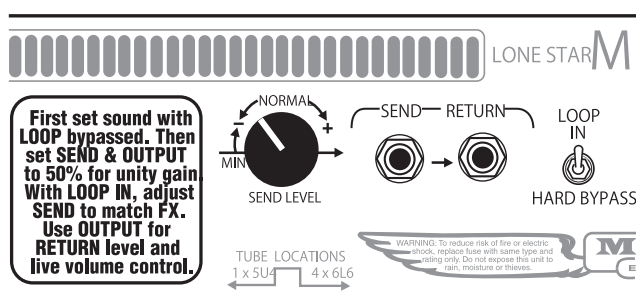
レクチファイア・トラッキング機能はチャンネルを認識し、その電源の状態を判断し、自動的に最適な整流回路のタイプを選定し、常に最良のサウンドを確保します。50Wモード時には真空管を使用した魔法のようなヴァイブレーションを繰り出し、また100Wモード時には、フルパワーのチャンネルに併せたダイオード・整流回路により、大容量ヘッドルームを実現。

シリコンダイオード選択時にはソリッドステートな整流部による強力なパワーと大容量のヘッドルームが、立ち上がりが高くインパクトのあるタイトでアタッキーなサウンドを作り上げることが可能。スイッチをシリコンダイオードに設定した場合はフロントパネルのチャンネルやワット数の設定に係わらず、常にダイオードモードを選択します。またこのつまみをチューブ・レクチファイア・トラッキングに設定した場合、どちらのチャンネルにおいても50W選択時には自動的に5U4Gを使用した整流管による整流回路が選択されます。また片側のチャンネルのみを100Wに設定した場合、50Wに設定したチャンネルは整流管を選択すると同時に、100Wを選択したチャンネル側は自動的にシリコンダイオードによる整流回路が選択され、チャンネル同士のマッチングを取るよう設計されています。

**NOTE:** 50W選択時には、フロントパネルのACスイッチをTWEEDにすることも試してみてください。この操作により、サウンドに新たなシナリオが生み出され、整流管回路と組み合わせて使用することで驚くべきサウンドを生み出すことが可能です。この整流部とACスイッチの組み合わせにより、驚くべき美しいサウンドを生み出すことができるのです。それぞれのモードを組み合わせ、あなたにとってベストなサウンドを作り上げてください。

## バックパネル:

### FX LOOP:Series (FXループ/直列):



Lone Starはプリアンプ回路とパワーアンプ回路の間に、外部エフェクト機器との接続を行うFXループを搭載しています。フロントパネルで設定を行った音量に対し、外部機器への出力を調整する場合はSEND LEVELつまみに調節を行うようにしてください。また、LOOP IN / HARD BYPASS切り替えスイッチにより、ループ回路をバイパスすることが可能です。ループ回路をバイパスすることにより、余分なノイズを抑えたり、信号の音痩せを防ぐことが可能です。また、フロントパネルの項でも述べましたが、フロントパネルのOUTPUTおよびSOLOコントロールはLOOP INの時にのみ、マスターアウト及びブーストコントロールとして機能します。

Lone Starはプリアンプ回路とパワーアンプ回路の間に、外部エフェクト機器との接続を行うFXループを搭載しています。フロントパネルで設定を行った音量に対し、外部機器への出力を調整する場合はSEND LEVELつまみにちえ調節を行うようにしてください。また、LOOP IN / HARD BYPASS切り替えスイッチにより、ループ回路をバイパスすることが可能です。ループ回路をバイパスすることにより、余分なノイズを抑えたり、信号の音痩せを防ぐことが可能です。また、フロントパネルの項でも述べましたが、フロントパネルのOUTPUTおよびSOLOコントロールはLOOP INの時にのみ、マスターアウト及びブーストコントロールとして機能します。

### エフェクトループの接続方法

- 1.) Lone Starのリアパネルにある、SEND端子から、外部エフェクトプロセッサのINPUTへ、モノラル1/4シールド・ケーブルで接続を行ってください。
- 2.) 接続した外部エフェクトプロセッサのOUTPUTから、Lone StarのリアパネルにあるRETURN端子へ、モノラル1/4シールド・ケーブルで接続を行ってください。
- 3.) 接続されたエフェクトプロセッサの入力レベルが適正になるよう、Lone StarのリアパネルにあるSEND LEVELコントロールで調節を行ってください。
- 4.) 最後にフロントパネルのOUTPUTコントロールで、最終的な出力レベルの調節を行ってください。

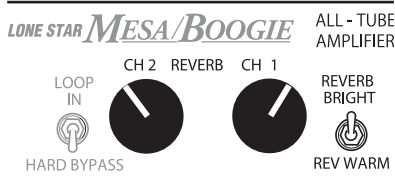
**NOTE:** 一般的に、エフェクトループを使用した際、音質に何らかの影響があることは周知の事実です。通常は特にトップエンド(高域)に微細な変化があることが多く、これはループに接続したエフェクトプロセッサを直列で接続することに起因します。ループに接続を行うエフェクトプロセッサは、一度Lone Starとの相性を確認してからご購入することをお勧めします。

**NOTE:** ループ回路を組み込む際、信号経路として二つの真空管を介した回路に、アンプ全体の位相を反転させた状態で接続されます。これは私たちがここで説明を行わない限り、まず気づくことがないことだと思われます。従って、音質的にはこの回路設定による影響は皆無となっております。

もしも上記の位相について考慮しなければならないケースがあるとすれば、Lone Starを他のアンプとステレオ接続した場合が想定されます。(2台のLone Starを同様のセッティングでステレオ接続した場合にはこの問題は起こりません) この場合、もう一方に接続したアンプとの全体的な位相バランスを考慮する必要があります。もしも二つのアンプが逆相となっていた場合は、ステージの両脇にアンプをセッティングするなどの配慮が必要となります。

## バックパネル(続き):

### REVERB (リバーブ):

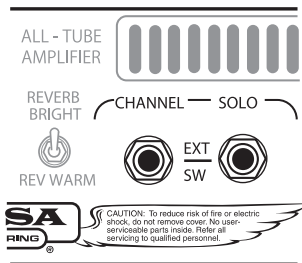


Lone Starにはそれぞれのチャンネルに独立したミックス・コントロールを備えたリバーブが装備されています。リバーブのボイスは、クラシック・タイプの二つのボイスから選択することが可能です。

Reverb Brightは倍音成分豊かでスプリングリバーブのレゾナンスをもつ、ヴィンテージ・ギター・アンプ・スタイルのリバーブを、またREV WARMではスムーズでウォームなラージ・プレート・リバーブ・サウンドを得ることができます。Lone Star のリバーブ・ユニットが、現在の我々においてベストなリバーブであることは、音を出していただければすぐにお分かり頂けることでしょう。

### CHANNEL / SOLO : External Switch Jacks

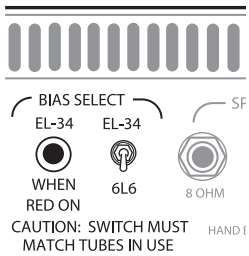
#### チャンネル/ソロ用外部スイッチ・ジャック:



CHANNEL / SOLO: この二つの1/4"ジャックはチャンネル切り替えおよびソロ・コントロールのON/OFF切り替え用の外部フットスイッチ入力端子です。より大きなステージでの演奏時等、付属のフットスイッチの使用が困難な場合はこのジャックにMIDIフットコントローラー等を接続し、コントロールを行うための接続端子となります。

EXTERNAL SWITCHジャックはモノラル・シールド接続の一般的なラッチタイプのスイッチに対応しています。同様に多くのMIDIのマスター・コントロール・スイッチでの対応が可能となっています。

### BIAS SELECT(バイアス・セレクト):



このミニトル・スイッチはパワー管を6L6からEL34に切り替える際、簡単にバイアスを適正にすることができます。これにより異なるバイアス抵抗値となる2種類のパワー管を自在に付け替えることができるのです。スイッチ左側にあるLEDはバイアス設定がEL34モードに設定されていると点灯します。

**NOTE:** バイアス・スイッチの設定を正しく行うことは非常に重要となります。この設定を誤るとアンプや真空管に深刻なダメージを与え、場合によっては破損することもあります。真空管を交換するたびに、この設定が真空管の種類と合致しているかを必ず確認するようにしてください!

クリーンなリズムスタイルからバラエティ豊かなウォームでファットなリード・ソロ・ボイスをお求めなら、工場出荷時にマウントされている6L6をご使用いただくことをお勧めします。これは私たちが研究と開発を重ねた結果、最も優れた周波数がブレンドされたウォームなサウンドであることが判っているからです。

しかしEL34を使用したいいくつかのケースにおいて立ち上がりの良いハイパワーなサウンドが得られることがあるのも事実です。Lone StarはEL34に載せ替えることで、ブリティッシュスタイルのソフトで倍音成分豊かなサウンドとは一線を画す、全く違った顔を見せることでしょう。その場合においてバイアス・セレクト・スイッチは真空管の交換を容易にする非常に優れた機能と言えます。

しかしながら信頼性という点において、私たちは6L6をお勧めします。私たちのこれまでの研究開発において、EL34タイプの真空管の継続使用は、6L6の継続使用と同じような確固たる信頼を得ることができませんでした。その結果、標準装備として6L6を出荷時のパワー管として採用するに至ったのです。

貴方がもしも仮にEL34をパワー管として選択する場合は、真空管の故障やトラブル発生時に備えて、少なくとも予備のEL34を最低一本は常に用意しておくことをお勧めいたします。

## バックパネル(続き):

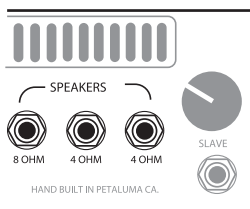
### BIAS SELECT(バイアス・セレクト、続き):

**NOTE:** AC電源スイッチをTWEEDに設定することでEL34(6L6においても同様)の負担を軽減することができます。TWEEDモードは真空管への負担が少なく、より良いサウンドを長持ちさせることにもつながります。

**NOTE:** またTWEED AC電源モードセッティング時のみにおいて、より小さな8極管6V6を使用することで幻想的なサウンドを創り出すことも可能です。その場合はバイアスセレクトを6L6側にし、4つのパワー管の全てを6V6に差し替えるようにしてください。より確実なセッティングを確保するために、どちらのチャンネルにおいても100Wに設定することをお勧めします。

**6V6使用時に通常のPOWER ONセッティングで電源を立ち上げることは絶対におやめください!**高出力のAC電源により、内部機器及び真空管に深刻なダメージを与え、故障の原因となります。また6V6使用時はスピーカーアウト・ジャックを8Ωから4Ωジャックに差し替えるようにしてください。これにより真空管への負担が軽減され、かつ最適なレスポンスを得ることができるのです。

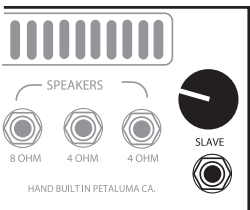
### SPEAKER(スピーカー出力):



Lone Starには8Ωと二つの4Ω出力が用意されており、様々なスピーカーの組み合わせに対応可能となっています。2×12Comboはパラレルに配線された二つの16Ωスピーカーを使用しておりハーネス接続により8Ωスピーカー出力に対応しています。また1×12Comboは8Ωスピーカーを使用しています。

基本的にインピーダンスのミスマッチによるアンプやスピーカーへの直接的なダメージはありませんが、スピーカーのインピーダンスがアンプの出力インピーダンスよりも低かった場合、パワー管の消耗は激しくなります。また本説明書にスピーカーの接続例が記してありますので、接続例を参照しながら正しい接続を行うようにしてください。

### SLAVE (SLAVEアウトプット):



SLAVEアウトプットおよびそれに付随するレベルコントロールは、本機のプリアンプおよびパワーアンプを経由した信号の出力を備えています。この機能は大規模会場等で、より大きな出力を要する場合において、エフェクトループの使用が望ましくない場合に使用します。この端子から出力されている信号は、スピーカーアウトから出力されている信号と同様の出力となっており、ダイレクト・レコーディング出力(ライン出力)ではありませんので、この端子からミキシング・コンソールのライン入力等へ接続することはできません。また同様にスピーカーのように高域のカットやトーンシェイピングは行われておりませんので、レコーディング用の信号としては不向きです。

**NOTE:** SLAVEアウトプットからの信号は非常に大きな出力となっています。そのためこの端子に接続を行う際は、SLAVEつまみを必ず最少(7:00のポジション)にしてから他機との接続を行い、かつ接続後はつまみを少しずつ上げ、接続機器や耳、またLONE STAR SPECIAL本体にダメージが加わらないよう、細心の注意を払うようにしてください。

**NOTE:** 一度SLAVEアウトプットから出力された信号をインプット端子やエフェクトループ等へ接続を行い、再び本機に戻すことは絶対におやめください。この接続を行うと強力なフィードバックループが発生し、高音のハウリング音が発生します。これは危機に損傷を与えるだけでなく、鼓膜破損等、人体への影響も懸念されますので注意してください。

### REVERB REMOTE JACK(リバーブ・リモートジャック):



このジャックはリバーブのオン/オフを外部接続フットスイッチでコントロールするためのリモート・ジャックです。1/4"モノラル・フォン・シールド・ケーブル(tip-ground)を使用し、市販のラッチタイプのフットスイッチ(別売り)に接続を行ってください。

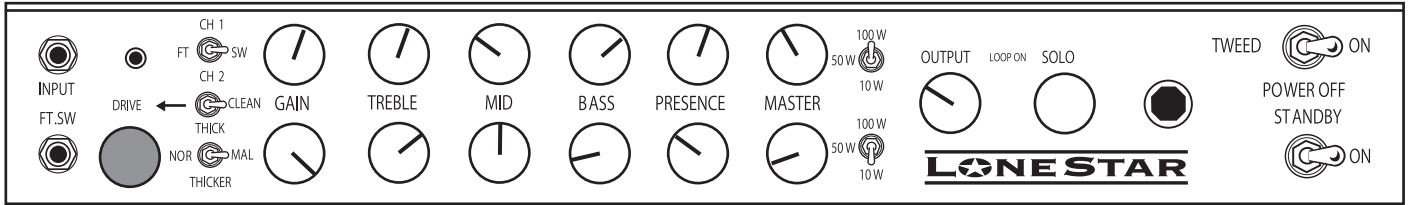
REMOTE  
FOOTSWITCH JACK



# サンプル・セッティング

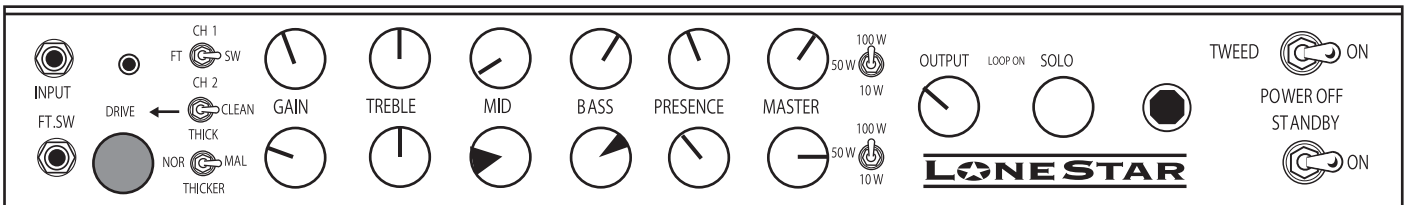
## SAMPLE # 1 LONESTAR STATE

### TUBE RECTIFIER TRACKING



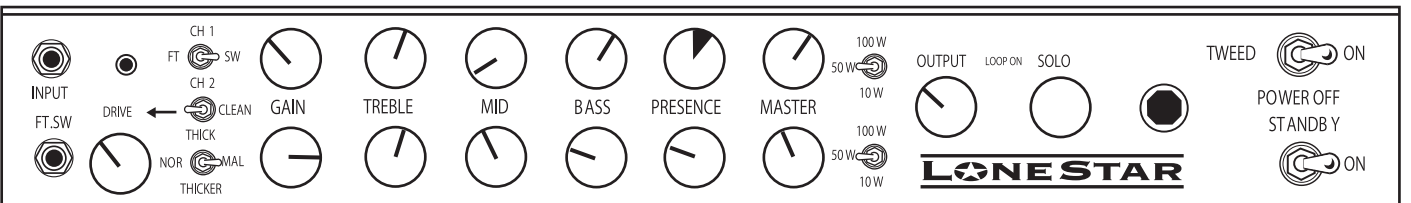
## SAMPLE # 2 CLEAN CLONES

### DIODES



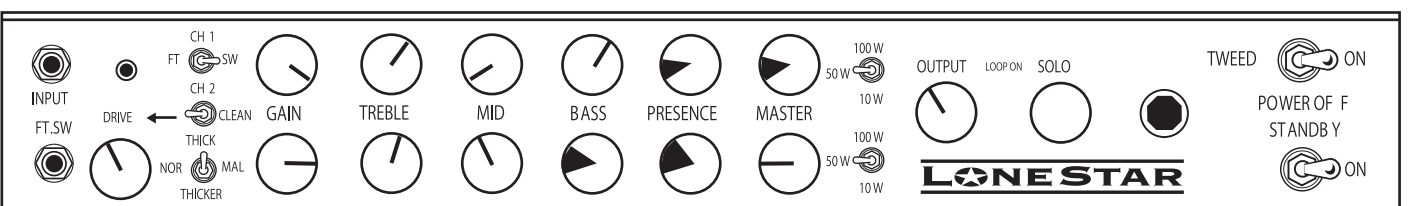
## SAMPLE # 3 TWANG & BANGIN'

### TUBE RECTIFIER TRACKING



## SAMPLE # 4 PURR & GRIND

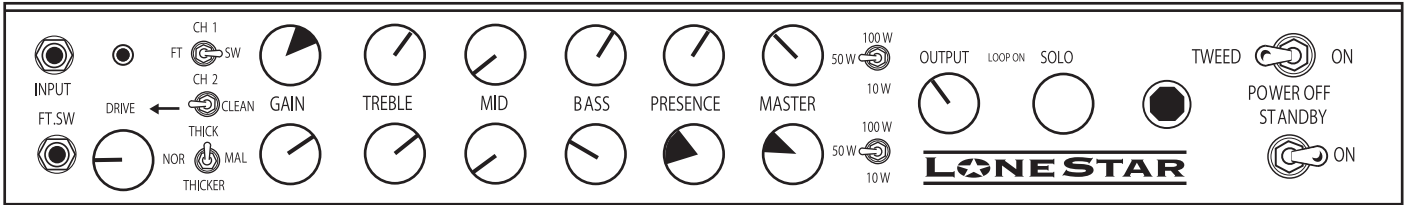
### TUBE RECTIFIER TRACKING



# サンプル・セッティング

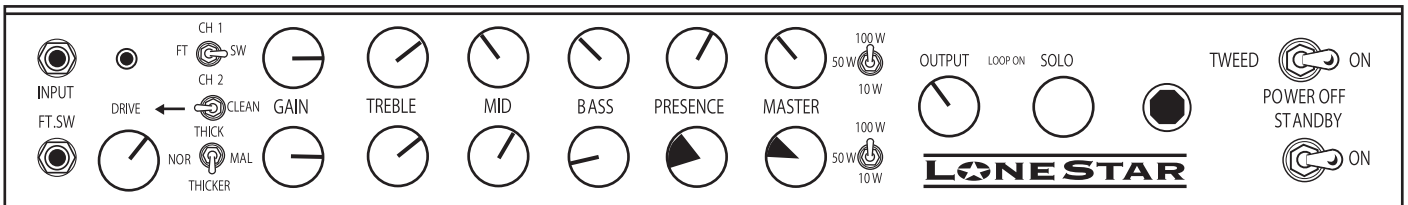
## SAMPLE # 5 PASS THE SAUCE

## TUBE RECTIFIER TRACKING



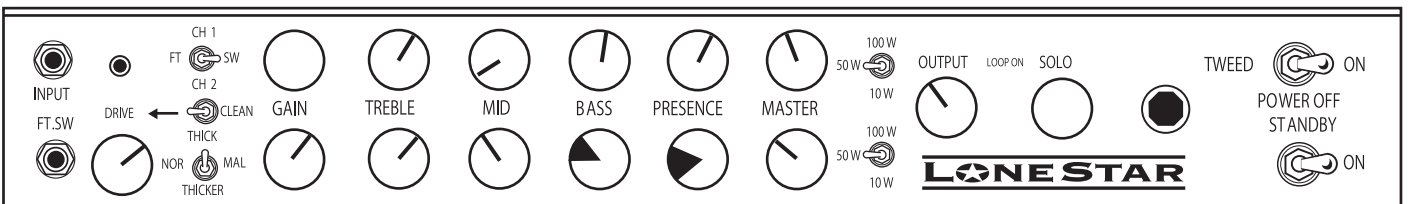
## SAMPLE # 6 BARBEQUE

## DIODES



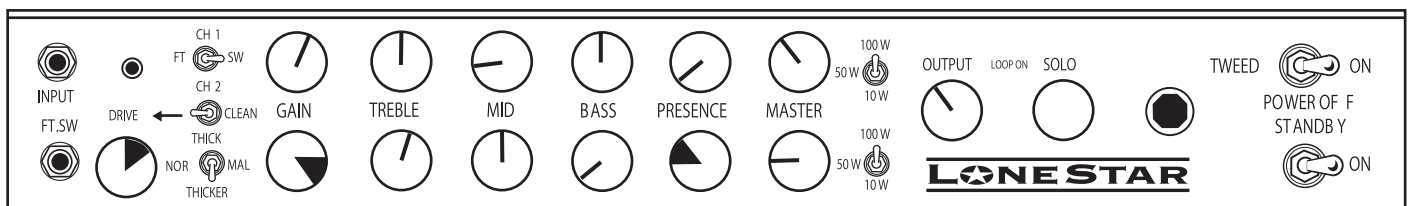
## SAMPLE # 7 AUSTIN - TACEOUS

## DIODES OR TUBE TRACKING



## SAMPLE # 8 ARMADILLO

## TUBE RECTIFIER TRACKING



# ユーザ・セッティング・テンプレート

SETTING # 1

SETTING # 2

SETTING # 3

SETTING # 4

SETTING # 5

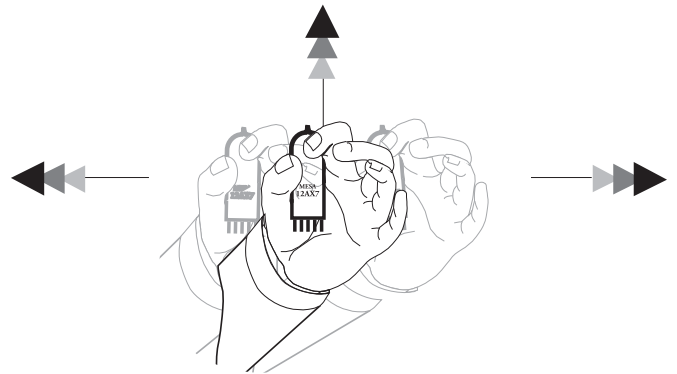


## プリ・アンプの真空管の問題を診断する:

時折、僅かではありながらも、プリ・アンプの真空管ノイズを経験した事があるでしょう。しかし、これがすぐに故障に繋がるというわけではありませんので、安心して下さい。この不安を解消する1番の近道は、真空管を交換する事です。なるべくパフォーマンスを中断しない為にも、少なくともいくつかの予備の真空管を、常時携帯しておくといいでしょう。このちょっとしたプリ・アンプの問題は、主に2つのカテゴリーに分けられます: ノイズとマイクロフォニック・プロブレムです。ノイズの種類は、パチパチ音であったり、ホワイト・ノイズ、ヒス・ノイズ、ハム・ノイズ等があります。マイクロフォニック・プロブレムは、ハイ・ゲインのモードで、ゲインやボリュームを大きくした時に、金属的な周波数の高い音でハウリングを起こします。マイクロフォニック・プロブレムは、楽器側のボリュームを絞ったり、楽器をアンプから外す事で、ハウリングが止まるか否かで、問題を切り分ける事が出来ます。ハウリングが、ピックアップのフィードバックによるものであれば、これでハウリングが止まるはずだからです。マイクロフォニック・プロブレムは、機械的な振動やショックによって引き起こされます: マイクフォンを叩くというのが、マイクロフォニック・プロブレムの語源になっています。

1つのモードやチャンネルのみで、プリ・アンプの真空管の問題が起きるのならば、その問題を解決する最善の方法は、真空管の交換です。反対に、特定のモードやチャンネルに、トラブルが絞れない場合は、全てのモードやチャンネルに関わっている、パワー管をドライブする、真空管に問題があるのかもしれませんが、あるいは、可能性は低いのですが、ドライバー真空管に問題があるのかもしれませんが、- ですので、特定のモードやチャンネルに絞れない場合は、ドライバー真空管が交換してみるのが良いでしょう。ドライバー真空管の問題は、一般的に、パチパチ音やハム・ノイズが、アンプの出力から聞こえるという症状になって現れます。

ノート: 真空管をソケットから取り外すときは、図の様に、真空管の上の方をしっかり握って、左右に揺らしながら、上に引き上げて下さい。



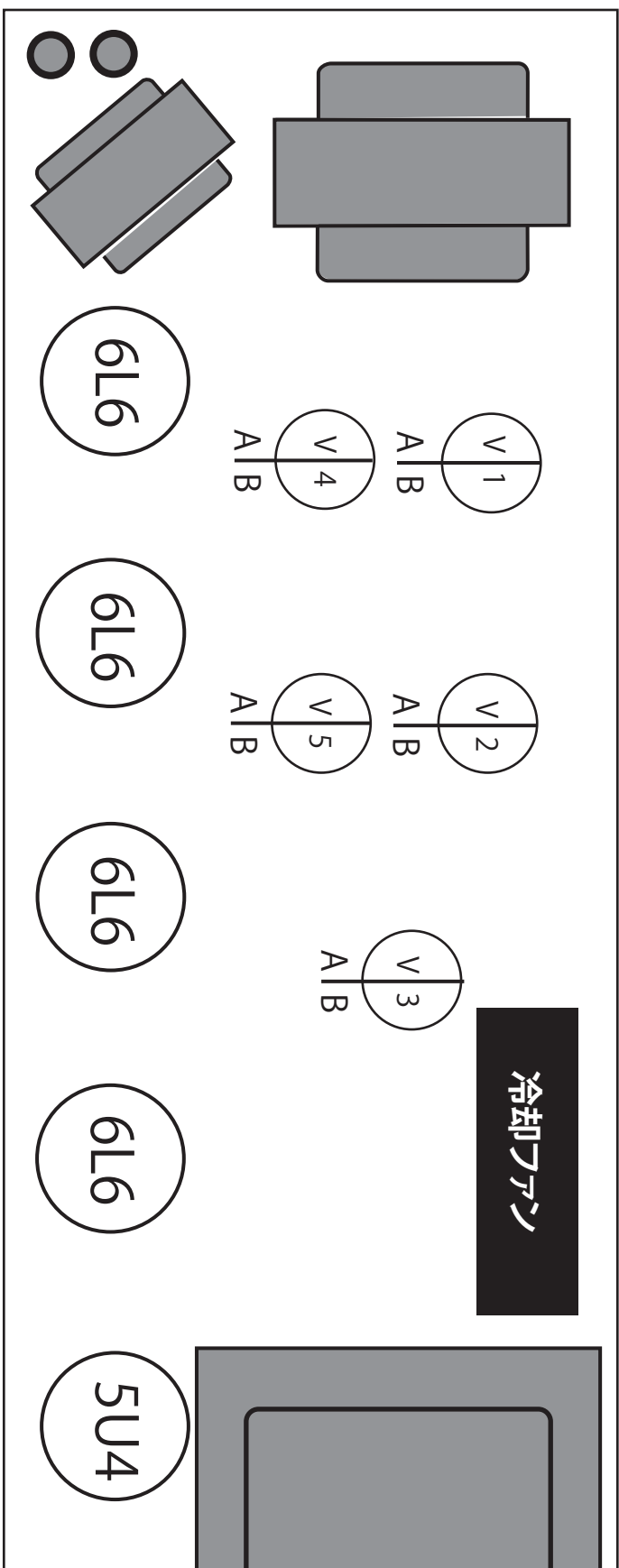
トラブルの原因が特定出来ない場合に、一番早くて確実な方法は、小さなプリ・アンプの真空管を同時に交換する事です。しかし、その後どこに問題があるかが解ったときの為に、外した真空管を保管しておいて下さい。入力ジャックに近い真空管のサウンドがノイズっぽく感じるかもしれませんが、それは、その真空管が一番始めの真空管であり、その後その出力が、他の真空管で増幅されていくからです。その理由から、“インプット・ソケット”(通常V1と表示されています)に装着する真空管は、最もノイズが少ない必要があります。プリ・アンプの後段・パワー管の直前の真空管にノイズがなければ、殆ど問題は発生しません。このアンプには、最も最適な真空管が装着されていますので、真空管を交換する場合は、全部一度に外すのではなく、1つ1つ外して取り付ける様にして下さい。問題の無い真空管を戻すときは、必ず元々装着してあったソケットに戻す様にして下さい。真空管を交換するときは、アンプの電源をSTANDBY(スタンバイ)にしてから行って下さい。そうする事で、スピーカーから大きなノイズになる事を防ぐ事が出来ます。そうしないと、たとえゆっくり真空管を取り外したとしても、ノイズが出る事があります。

シャーシを運搬するときは、新聞紙を多く重ねて包んで下さい。包んだシャーシと、段ボール箱の間には、15センチ程の隙間“クラッシュ・スペース”を空けて下さい。エア・パッキングで包むのも良いですが、発泡スチロールは使用しないで下さい。- 発泡スチロールは、運搬中に擦れて、その粉がアンプ内部に入り込み、電子部品に損傷を与える可能性があります。プリ・アンプ管は、通常の使用で壊れる事は殆どありませんので、代替品と交換しても、結果が変わらない場合は、元に戻して下さい。稀な事ではありますが、トラブル・シューティングの手順に従って損傷していることがわかったら、適切に交換を行って下さい。

ノート: プリ・アンプ管を指で弾いた時に、金属っぽい音がするのは、異常ではありません。真空管からパチパチ音が出力されない限りは、通常通りに使用する事が出来ます。

# LONESTAR 真空管機能表

真空管を交換する前に必ず電源を切ってください。



## 真空管機能の詳細

- |                    |                         |
|--------------------|-------------------------|
| V1 A = CH2ドライブ段    | V3 A = エフェクトルーブリターン     |
| V1 B = 入力ゲイン段      | V4 A = リバーブリターン         |
| V2 A = ゲイン第3段      | V4 B = リバーブドライブ         |
| V2 B = ゲイン第2段      | V5 A & V5 B = フェイズ・インバー |
| V3 A = エフェクトルーブセンド | ター/フェイズ・ドライブ            |

## スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド:

### インピーダンス:

スピーカー接続において最も基本的で重要なのは、位相を正相にする事です。これにより素晴らしい音を出力する事が可能になります。これはそんなに難しい事ではありません。負荷についていくつかの事と、最適な負荷でスピーカーを接続する事を理解すれば良いのです。

*MESA/Boogie* アンプは、4 オームと 8 オームを扱う事が出来ます。真空管アンプは、4 オーム未満でドライブする事はしないで下さい。;これを行うと、出力トランスを損傷する可能性があります。2 オームを扱う事の出来る数少ないアンプ (例えば MESA (メサ) の Bass 400+) であれば大丈夫です。反対に高い抵抗値 (例えば 16 オーム等) の場合はアンプを傷める事はありません。

### ミス・マッチング:

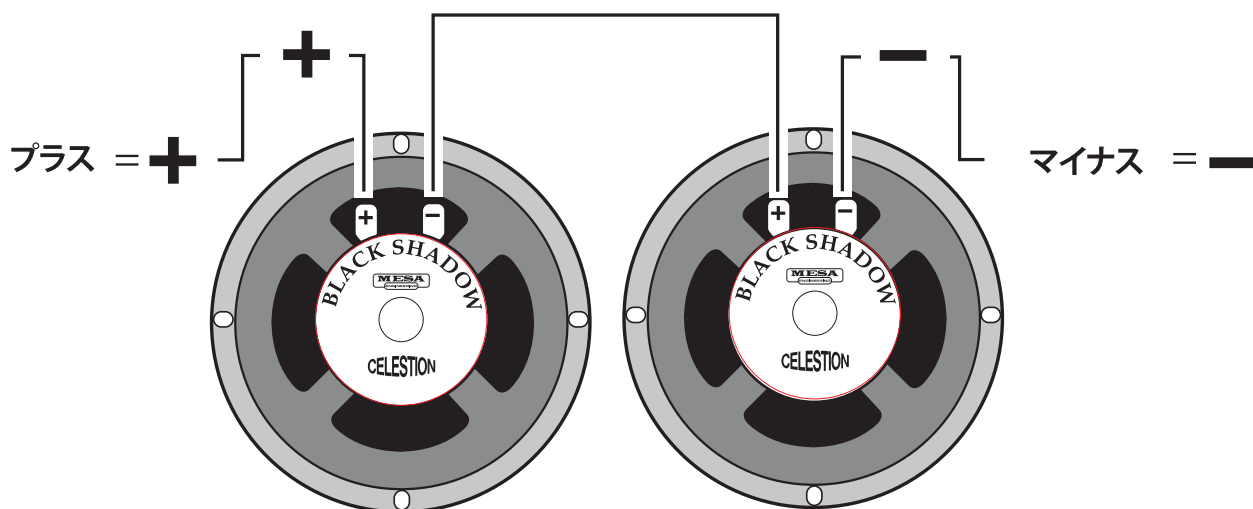
高い抵抗値 (例えば 8 オーム出力を 16 オームのキャビネットに接続) でドライブすると、少しフィーリングが異なり、レスポンスが際立った感じになります。少しのミス・マッチであれば、トーンが若干暗く、出力とアタックが少し弱く、レスポンスが少し速くなる程度です。スピーカー・キャビネットが複数になると、ミスマッチは選択肢の 1 つになるほどです。

### キャビネット・インピーダンスの算出方法:

お持ちのスピーカーが 1 台の場合は、そのスピーカーのインピーダンスとアンプのインピーダンスを合わせて下さい。複数のスピーカーをお持ちの場合は、アンプにかかる負荷を計算しなければなりません。複数のスピーカーの接続方法は次の 3 種類になります。:

### シリーズ(直列):

スピーカーを直列に接続した場合、それぞれのスピーカーのインピーダンスを単純に加算します。例えば、8 オームのスピーカーを 2 台直列に接続した場合は、16 オームになります。



スピーカー A = 8Ω

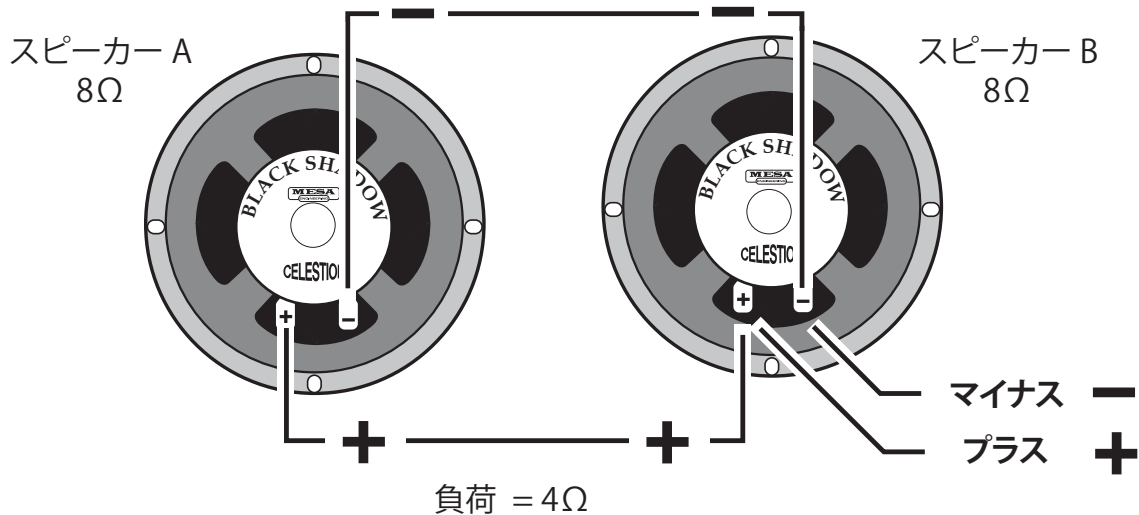
スピーカー B = 8Ω

シリーズ(直列): スピーカーAのマイナス端子と  
スピーカーBのプラス端子を接続

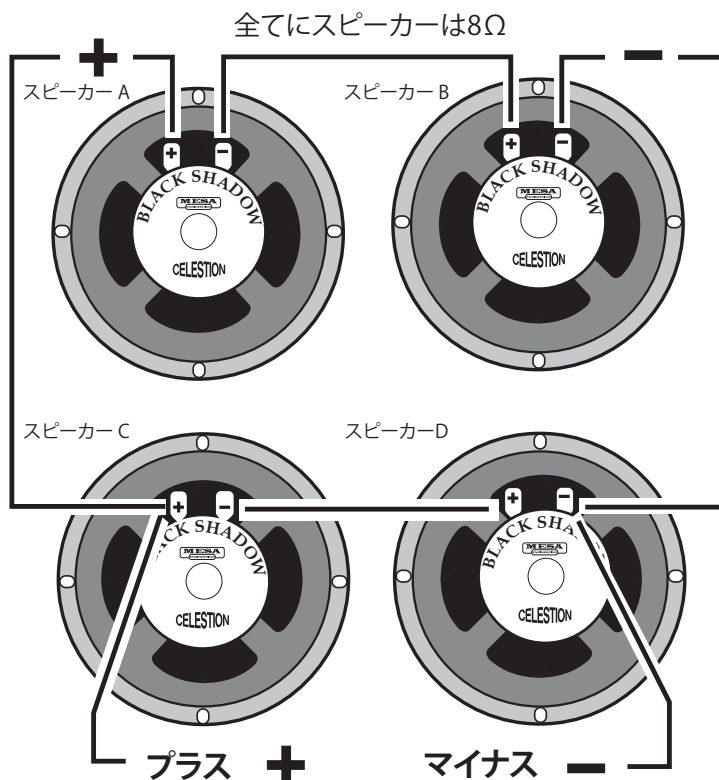
## スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド(続き):

### パラレル(並列):

スピーカーを並列に接続した場合、スピーカーの抵抗値は下がります。2台の8オーム・スピーカーを並列に接続した場合、負荷は4オームになります。接続するスピーカーが全て同じ抵抗値であれば計算は簡単ですが、異なる抵抗値のスピーカー(例えば、8オームと4オーム、16オームと8オーム等)を並列に接続する場合は、少しややこしくなります。計算式は、それぞれの抵抗値をかけ算した数値を、それぞれの抵抗値を足し算した数値で割ります。例えば8オームと4オームであれば、 $8 \times 4 \div (8 + 4) = 2.6666$ オームになります。パラレル(並列):スピーカーAのプラス端子とスピーカーBのプラス端子、スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのマイナス端子をそれぞれ接続。



### シリーズ(直列)とパラレル(並列)の組み合わせ:



これは、2セットの直列接続したスピーカーを並列に接続する組み合わせです。ここで重要なのは、全てのスピーカーの合成抵抗値が低くなり過ぎてアンプに負担をかけない様にする事です。

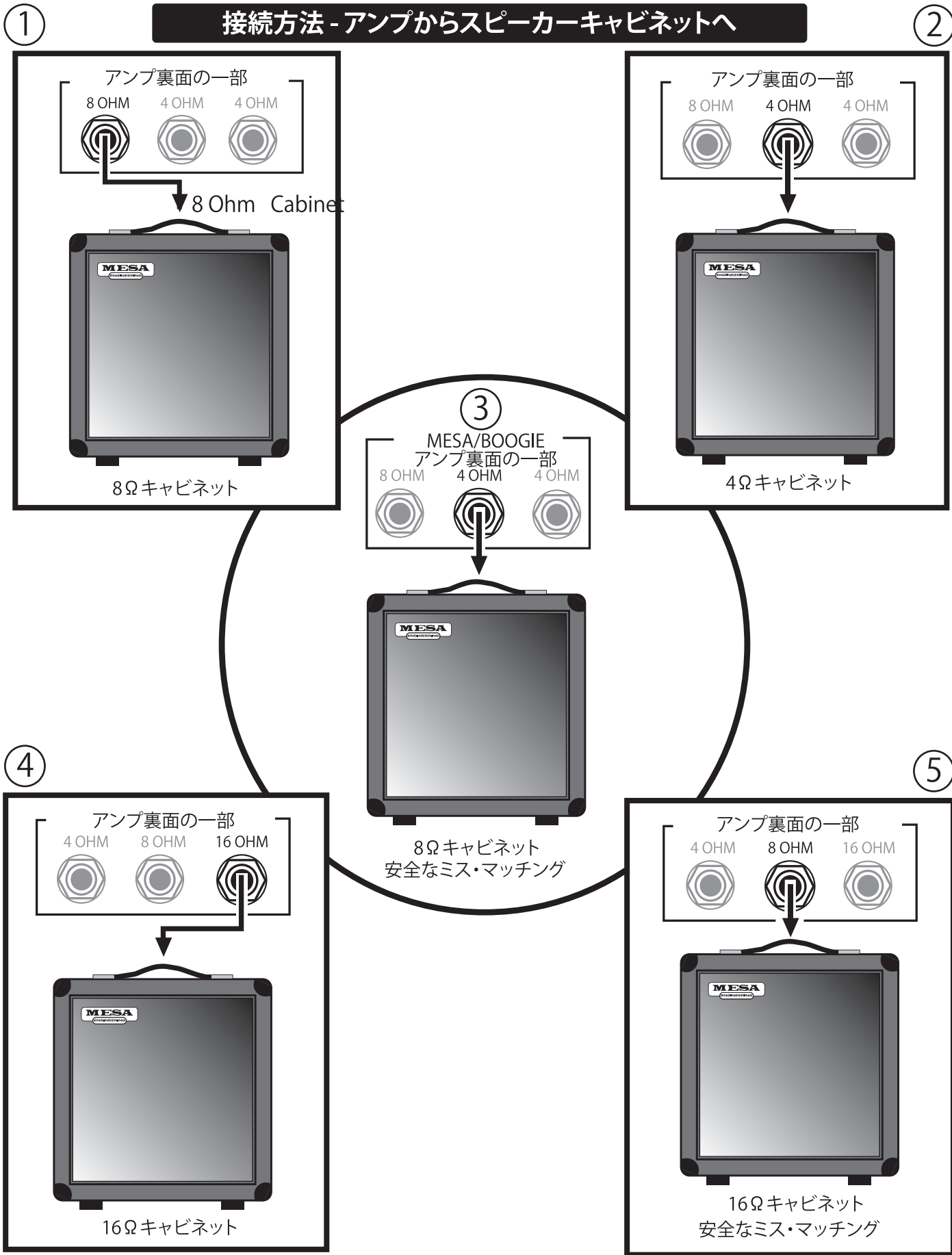
スピーカーAのプラス端子とスピーカーCのプラス端子を接続。

スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのプラス端子を接続。次にスピーカーCのマイナス端子とスピーカーDのプラス端子を接続。

そして最後にスピーカーBのマイナス端子とスピーカーDのマイナス端子を接続します。

4台の8オーム・スピーカーをシリーズ・パラレル接続した時の合成抵抗値は、8オームになります。

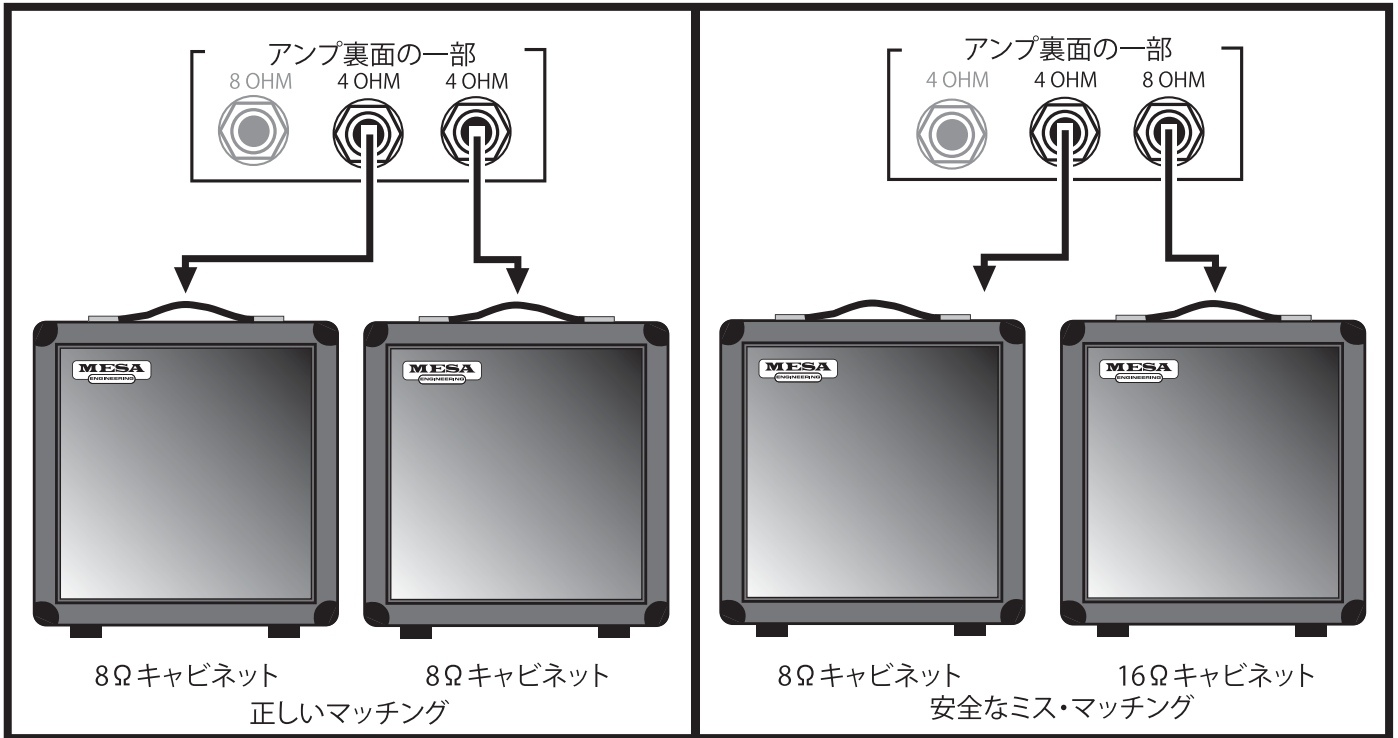
接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ



接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

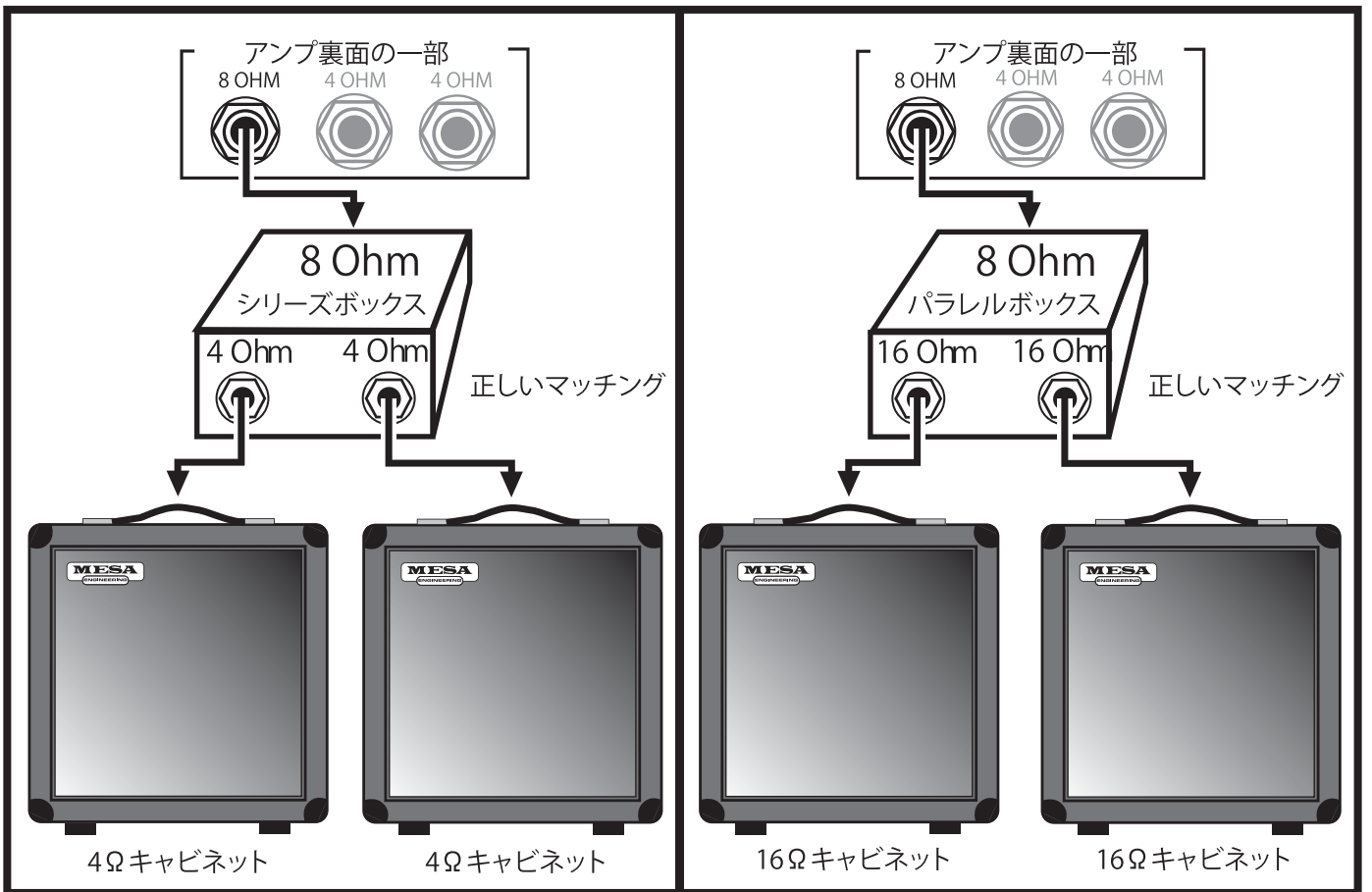
⑥

⑦



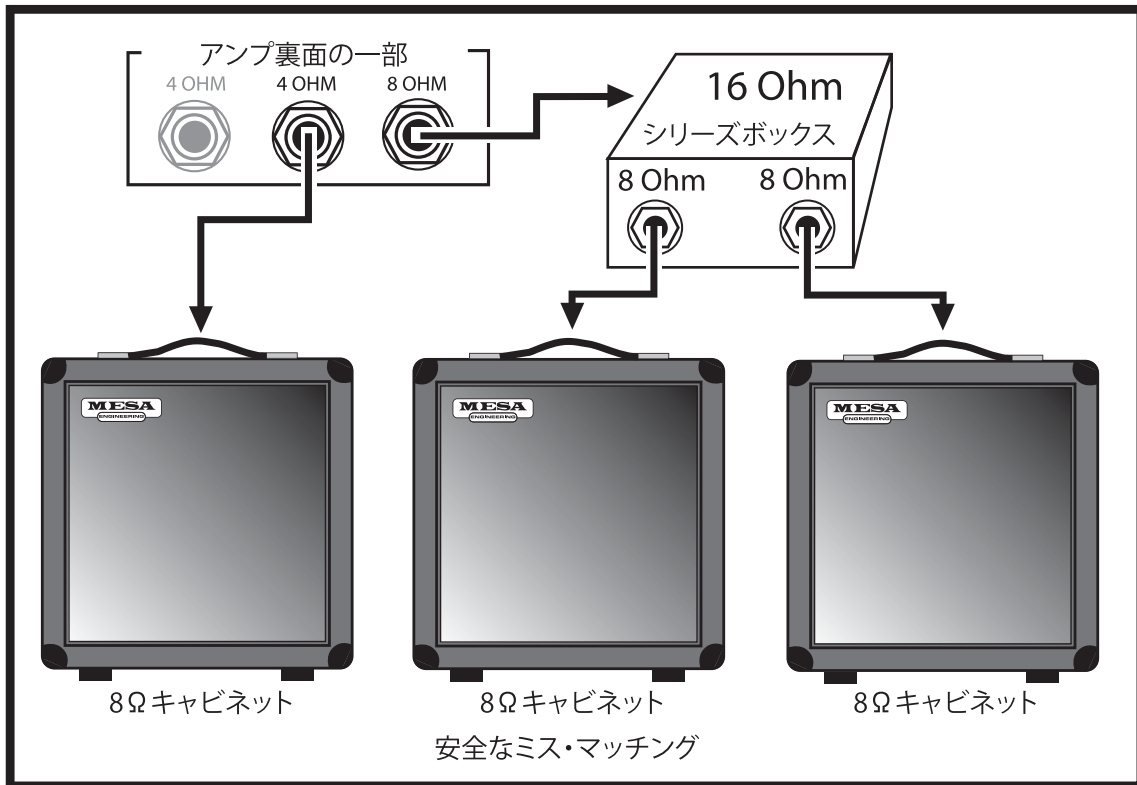
⑧

⑨

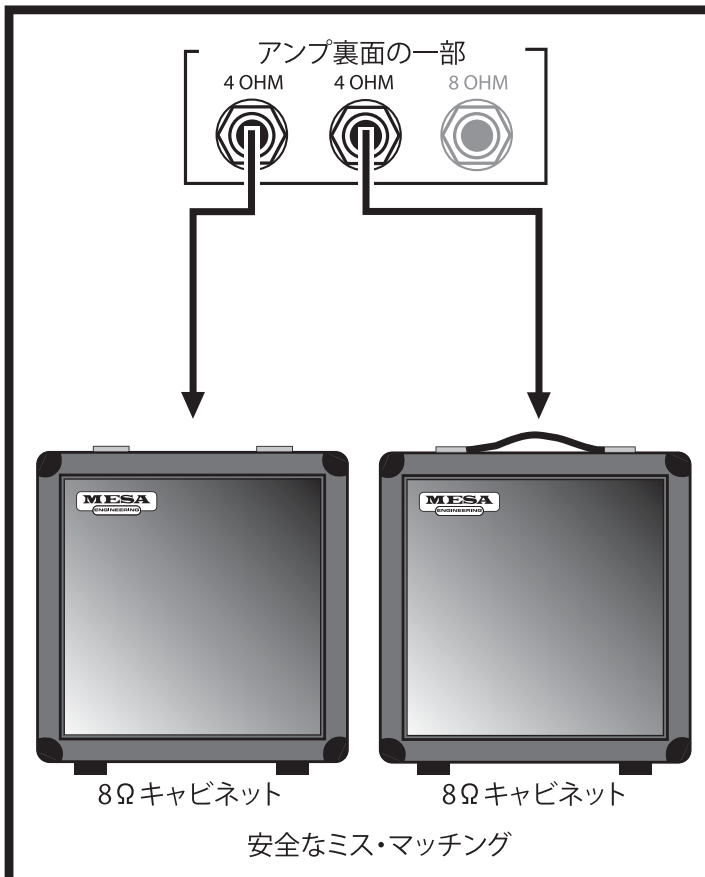


## 接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

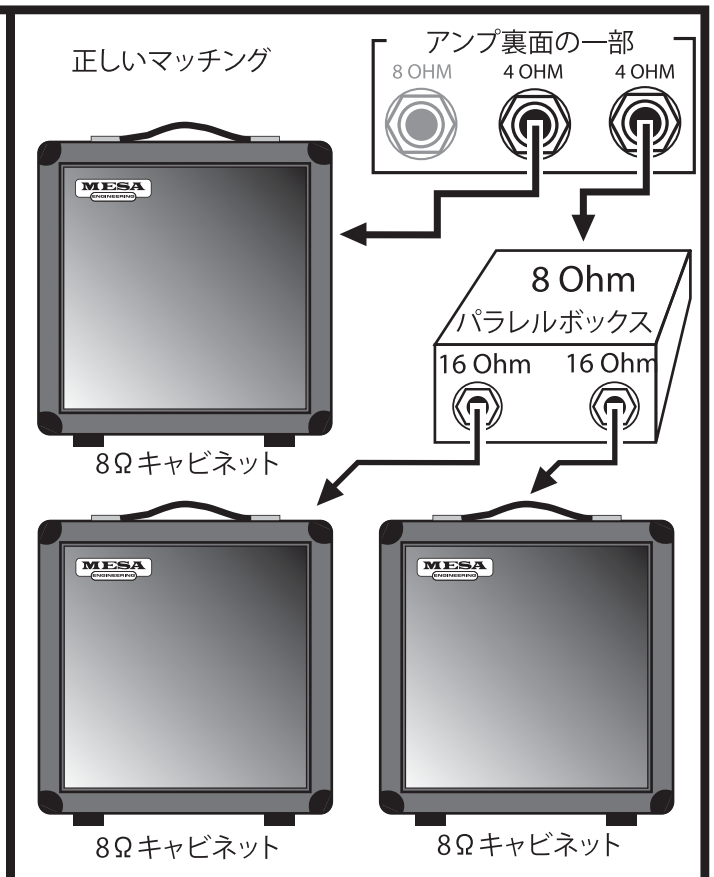
10



11



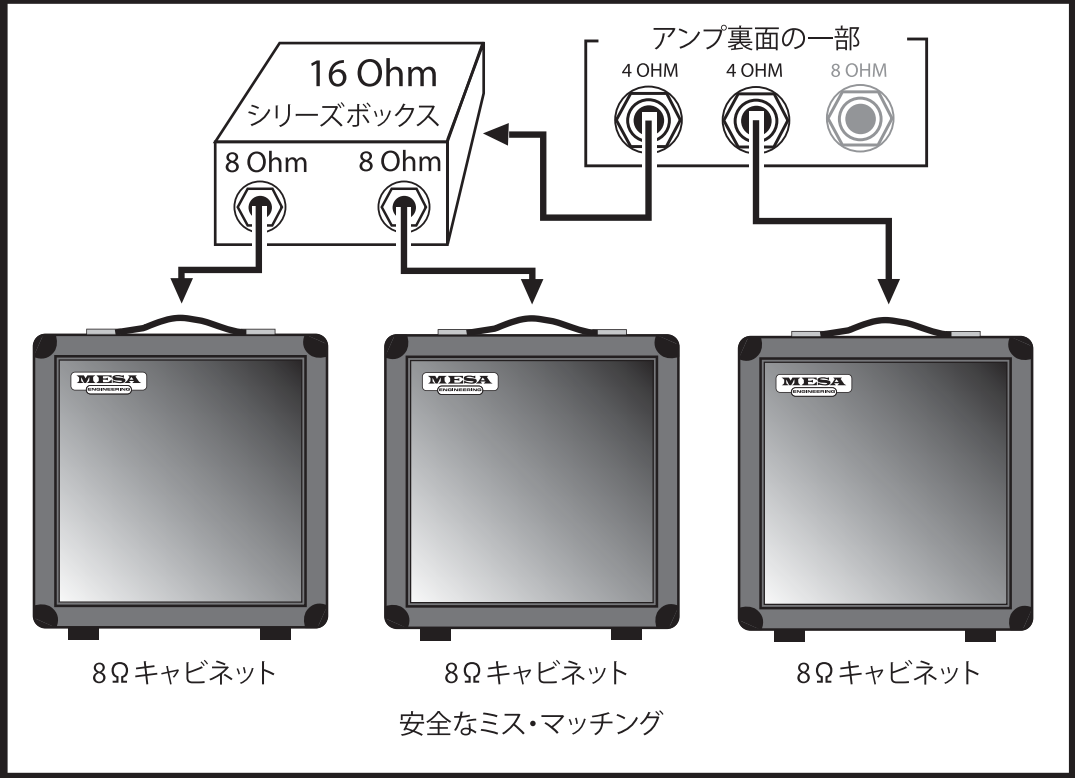
12



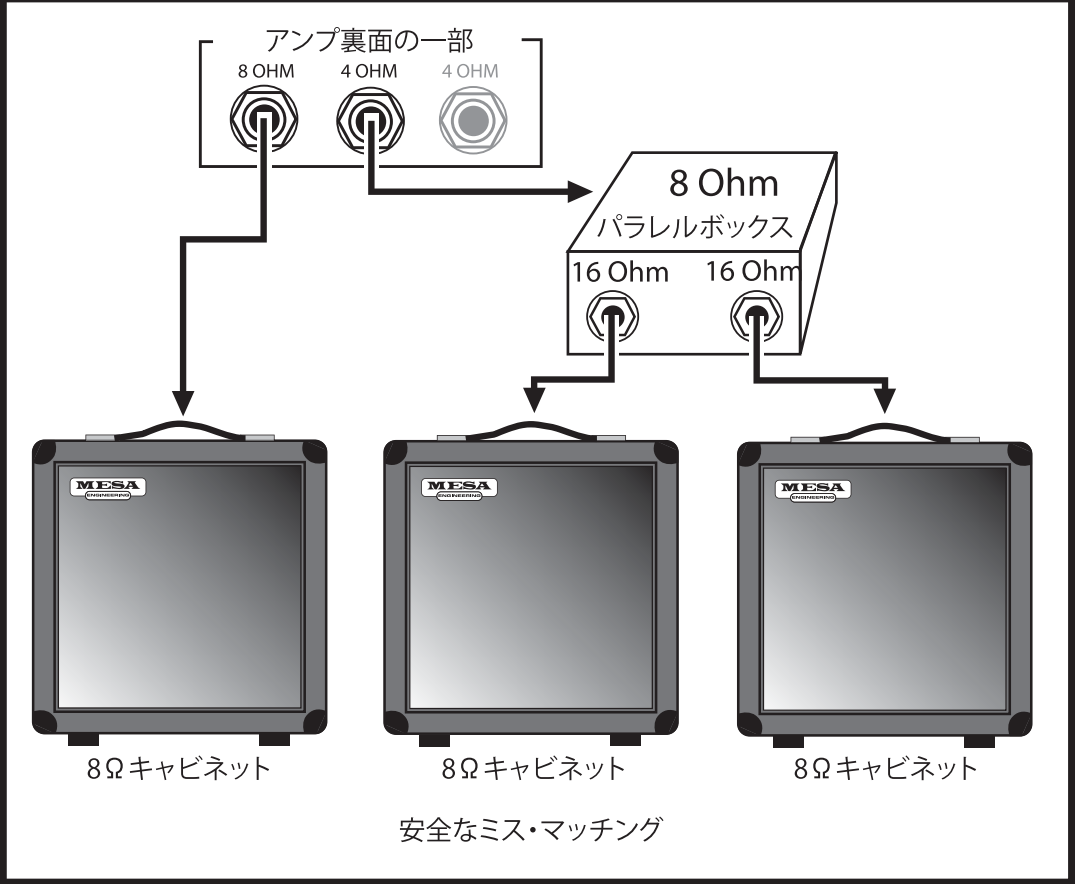


接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

13



14





*The Spirit of Art in Technology*



**ギブソン・ブランズ・ジャパン株式会社**

Email: [service.japan@gibson.com](mailto:service.japan@gibson.com)

「@gibson.com」からのメールを受信できるよう設定をお願いいたします

お電話でのお問い合わせ窓口：0120-189433（通話料無料）

受付時間 9:30 - 17:00（土、日、祝日、年末年始を除く）